

# 日 焼 遺 跡

福岡県筑紫野市大字岡田所在遺跡の調査

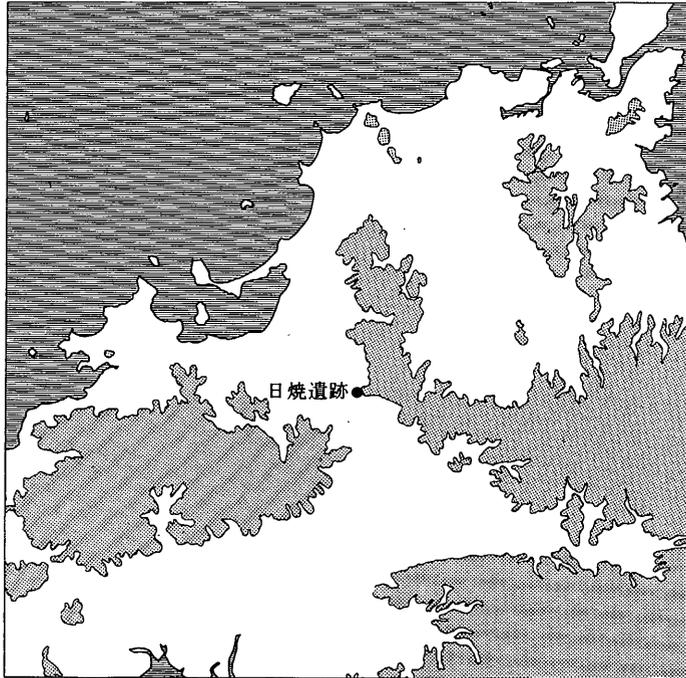
筑紫野市文化財調査報告書

第 20 集

1989

筑紫野市教育委員会

ひ やけ 遺 跡  
日 焼 遺 跡



## 序

この報告書は、花き等地方卸売市場の移転に先がけて発掘調査した日焼遺跡540㎡の発掘調査報告書であります。

筑紫野市は、福岡市と久留米市のほぼ中間に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から交通の要衝として栄えてまいりました。弥生時代の遺跡からは、中国製の鏡をはじめ銅剣や銅戈が発見され、古墳時代には九州でも最も古い前方後円墳と言われる原口古墳をはじめ多くの古墳が築かれました。大宰府条坊と言われる古代の都市計画地域も当市の北半を含み、大宰府政庁から豊前へ通じる国道も当市を通ります。近年の発掘調査では万葉集にも詠われた蘆城駅家も明らかになりました。鎌倉時代頃は市内各所の発掘調査で中国製の陶磁器が発見され、福岡県指定史跡の武蔵寺跡の一角からは多くの経塚が発掘されました。戦国時代には高橋氏、筑紫氏と島津氏との戦が繰り広げられた当市も、江戸時代は長崎街道、博多街道が通り、筑前六宿の原田宿、山家宿が置かれました。そして今日、九州縦貫自動車道、国道3号線、国道3号線南バイパス、国道200号線、国道200号線冷水バイパス、国道386号線、鳥栖－筑紫野有料道路、JR鹿児島本線、JR筑豊本線、西鉄大牟田線が通っています。ここには6万余の人々の暮らしがあり、その数は年々増加しております。

福岡が、日本におけるアジアに開かれた門戸と位置付けられるならば、筑紫野市は、九州におけるクロスロードと言えましょう。当教育委員会は、このようにして育まれた歴史を大切に後世に伝えて行く使命をあらたに今後とも努力して行く所存でございます。

平成元年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 淵 正 敏

## 例 言

1. 本書は福岡県筑紫野市大字岡田313番地外に所在する日焼遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は九州日観植物株式会社の委託を受けて、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 発掘は遺跡上に建築される部分、およびその周辺1～2m程度に対し実施した。
4. 発掘調査地域以外については、客土後、アスファルト舗装し駐車場等として使用する条件を前提に調査は実施しなかった。
5. 現場での実測、写真撮影は奥村俊久が行った。
6. 遺物の実測は、奥村と森部順子が行い、写真は奥村が撮影した。
7. 製図は森田くみ子が行った。
8. 本書の執筆、編集は奥村があたった。
9. 仿製鏡に関し、塗布された顔料について本田光子氏（福岡市埋蔵文化財センター）、鏡について高倉洋彰氏（福岡県立九州歴史資料館）から貴重なご意見をいただいた。ここに感謝するしだいである。

# 本文目次

	頁
I 調査に至る経過 .....	1
II 位置と環境 .....	2
III 調査の内容 .....	6
1. 調査概要 .....	6
2. 竪穴式住居跡の調査 .....	6
(1) 1号住居跡の調査 .....	6
(2) 2号住居跡の調査 .....	18
(3) 3号住居跡の調査 .....	18
(4) 4号住居跡の調査 .....	20
(5) 5号住居跡の調査 .....	20
3. 溝状遺構の調査 .....	21
(1) 1号溝状遺構の調査 .....	21
(2) 2号溝状遺構の調査 .....	21
(3) 3号溝状遺構の調査 .....	21
(4) 4号溝状遺構の調査 .....	23
(5) 5号溝状遺構の調査 .....	23
(6) 6号溝状遺構の調査 .....	23
(7) 7号溝状遺構の調査 .....	24
(8) 溝状遺構出土遺物 .....	24
IV 小 結 .....	25
1. 1号住居跡出土の土器について .....	25
2. 3号住居跡出土の土器について .....	25
3. 3号住居跡出土の小形仿製鏡について .....	25
4. まとめ .....	26

# 挿 図 目 次

	頁
第1図 日焼遺跡周辺遺跡分布図(縮尺 1/25.000) .....	3
第2図 日焼遺跡周辺地形図(縮尺 1/2.500) .....	5

第3図	日焼遺跡遺構配置図 (縮尺 1/200)	折り込み: 6/7
第4図	1号住居跡実測図 (縮尺 1/40)	7
第5図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	8
第6図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	10
第7図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	11
第8図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	12
第9図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	13
第10図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	14
第11図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	15
第12図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	16
第13図	1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	17
第14図	1号住居跡出土土器製品実測図 (縮尺 1/2)	17
第15図	2号・3号住居跡実測図 (縮尺 1/40)	折り込み: 18/19
第16図	3号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	折り込み: 18/19
第17図	3号住居跡出土 製鏡実測図 (縮尺 1/1)	19
第18図	4号住居跡実測図 (縮尺 1/40)	20
第19図	4号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)	21
第20図	溝断面実測図 (縮尺 1/30)	22
第21図	溝出土土器実測図 (縮尺 1/3)	24

## 図 版 目 次

	本文対照頁	
図版表紙	3号竪穴式住居跡出土仿製鏡	19
図版 1(1)	日焼遺跡遠景 (東から)	2
	(2) 調査区全景 (上空から)	6
図版 2(1)	1号竪穴式住居跡 (東から: 遺物出土状況)	6
	(2) 1号竪穴式住居跡 (北から: 遺物出土状況)	6
図版 3(1)	1号竪穴式住居跡 (北から: 遺物除去状況)	6
	(2) 2号竪穴式住居跡 (南から)	18
図版 4(1)	3号竪穴式住居跡 (西から)	18
	(2) 3号竪穴式住居跡 (北から)	18
図版 5(1)	2号溝状遺構断面	21

	(2)	3号溝状遺構断面	21
	(3)	4号溝状遺構断面	23
図版	6(1)	5号溝状遺構断面	23
	(2)	6号溝状遺構断面	23
	(3)	7号溝状遺構断面	24
図版	7	1号竪穴式住居跡出土土器	8・10・11
図版	8	1号竪穴式住居跡出土土器	11~15
図版	9	1号竪穴式住居跡出土土器	15
図版	10	1号・2号竪穴式住居跡出土土器	16~18
図版	11	3号・4号竪穴式住居跡出土土器	折り込み：18/19・21

## 表 目 次

	頁
表1 第1図掲載遺跡地名表	4
表2 溝状遺構土層観察表	22
表3 小形仿製鏡面径出土量	26

# I 調査に至る経過

昭和61年3月28日、九州日観植物株式会社から筑紫野市教育委員会に、花き等園芸品の地方卸売市場移転新設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった。市教育委員会は現地を踏査した結果、埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、試掘調査が必要である旨の回答を行った。その後の協議で市場本体と進入路部分を分けて試掘調査を実施することとなり、同年7月17日から3日間にわたり進入路部分の試掘調査を実施した。この調査の結果、溝状遺構2条と土壌1基が検出され、弥生式土器片が出土した。この結果を基に協議を重ね、同年8月19日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。発掘調査は、同年8月25日から同年9月12日まで現地での調査を実施し、昭和62年3月末日をもって発掘調査報告書を刊行した。一方、本体部分については、昭和61年8月19日付けで埋蔵文化財試掘調査委託契約書を締結し、同年8月23日、25日の両日、試掘調査を実施した結果、工事予定地の北側に古墳時代前半を主体とする住居跡群の包蔵が推定された。この結果、構造物を建てる区域とその周辺について発掘調査を実施する事となり、昭和61年12月3日付けで発掘調査委託契約書を締結した。現地での発掘調査は、昭和62年1月16日から同年2月20日まで実施し、途中、整理作業の遅れから委託期限を昭和62年3月31日から平成元年3月31日に変更した。

なお、調査組織については下記のとおりである。

総括 筑紫野市教育委員会 教育長 松田康男（前任）  
筑紫野市教育委員会 教育長 永淵正敏

庶務 筑紫野市教育委員会 社会教育課 課長 山村 茂（前任）  
筑紫野市教育委員会 社会教育課 課長 川原孝之  
筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係 係長 山野洋一  
筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係 主事 奥村俊久

発掘調査 筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係 主事 奥村俊久

現場作業員 中川一生、中川ユキエ、中川秀吉、岡島和子、川口政一、片原高雄、  
富永実夫、富永 元。

室内整理作業員 大西ヨネ、村上喜代、井上惇子、竹田スミ子、大平繁子、林田由美、  
今石淳子、中島清美。

室内整理補助員 鶴味加代子、森部順子、森田くみ子。

## II 位置と環境 (第1・2図)

日焼遺跡は、筑紫野市大字岡田及び天山に所在する。

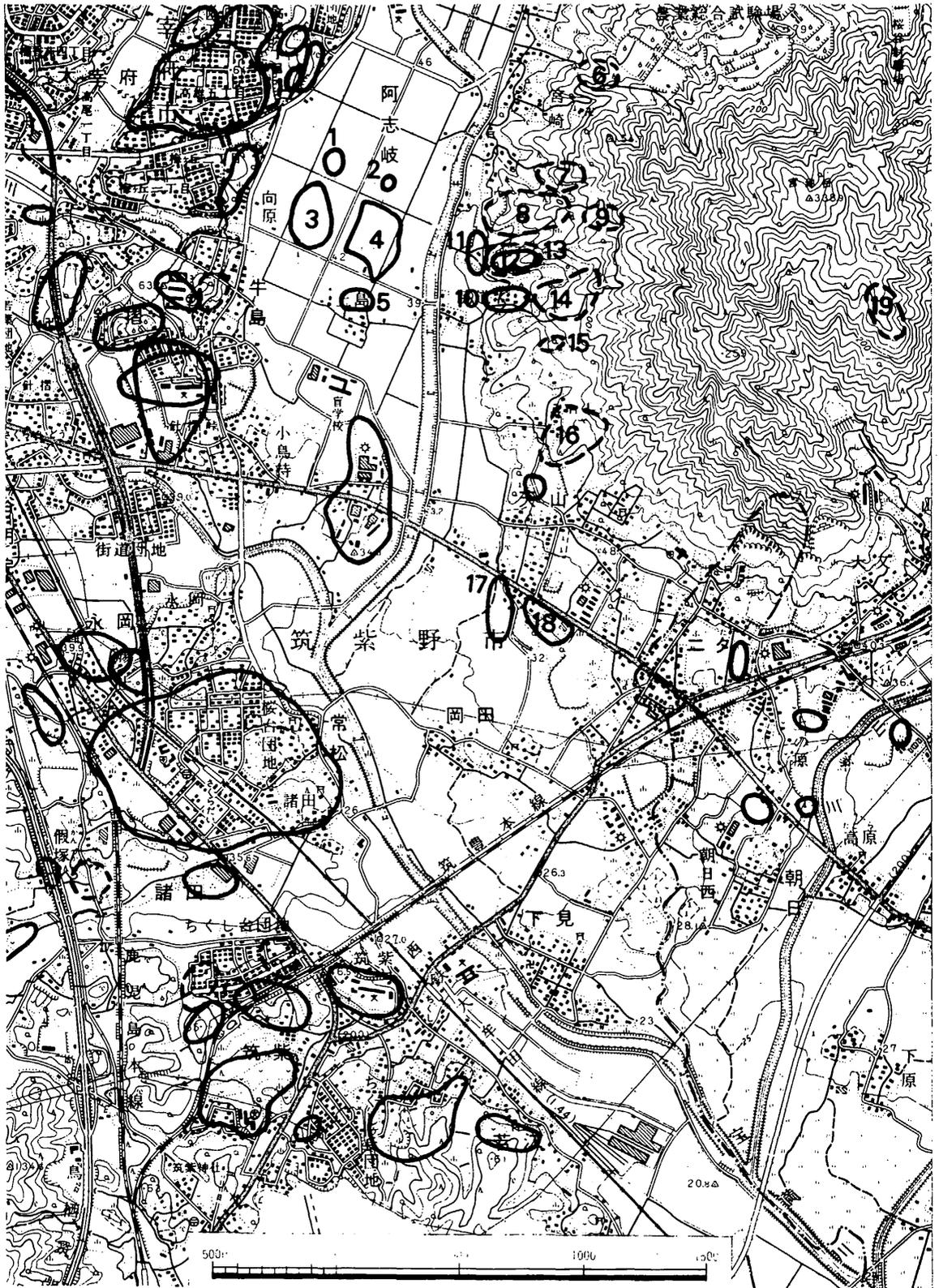
筑紫野市は、西に背振山塊、東に三郡山塊が迫り、その間に狭長な平野がある。この平野は、北が福岡平野、南が筑紫平野へと続く。この平野を潤す河川は、市の北西に鷺田川が流れ、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には、筑後川と合流し有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川は、三郡山に源を發し宝満山麓の東側を回り込むようにして流れた後、吉木・阿志岐の田畑を潤し、永岡付近で背振山塊九千部山に源を發す山口川と合流する。

吉木・阿志岐の平野部は、東に宮地岳(339m)、北に宝満山(868m)、西に高雄山(151m)から延びる丘陵に三方を囲まれる。宮地岳から南に延びる裾端部に日焼遺跡は所在し、西に宝満川と山口川の合流地点を望む。

宝満川流域には数々の遺跡が所在する。吉木・阿志岐の平野部には御笠地区遺跡<sup>註1</sup>がある。圃場整備事業に伴って発掘調査されたこの遺跡からは、蘆城駅家と推定される遺構や弥生時代後期から古墳時代を中心に遺構・遺物が発見されている。また、宮地岳山麓には古墳が多く、西麓北から杉の谷古墳群、阿志岐古墳群、脇道古墳群、老松神社古墳群、天山古墳群がある<sup>註2</sup>。これまで横穴式石室をもつ杉の谷古墳群第1～3号墳<sup>註3</sup>や阿志岐古墳群B群第21号墳<sup>註4</sup>、割竹形木棺をもつ同B群第22～26号墳<sup>註5</sup>、竪穴系横口式石室をもつ同A群第3号墳<sup>註6</sup>が発掘調査されている。東麓でも装飾古墳である殿様塚古墳をはじめ数多くの古墳が所在する<sup>註7</sup>。日焼遺跡が所在する宮地岳南側は、まだ埋蔵文化財の状況が明確でない。しかし、日焼遺跡の東隣には鞭掛遺跡<sup>註8</sup>が知られる。この遺跡は、まだ谷部を発掘調査したに止まるため不明瞭な部分が多いが、調査地周辺に弥生時代の集落跡や墓地等の所在が推測される。

### 註

- 註1 『御笠地区遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書第15集 1986 筑紫野市教育委員会  
註2 『福岡県遺跡等分布地図』(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編) 1980 福岡県教育委員会  
註3 『杉の谷古墳群』 筑紫野市文化財調査報告書第2集 1979 筑紫野市教育委員会  
註4 『阿志岐古墳群』 筑紫野市文化財調査報告書第7集 1982 筑紫野市教育委員会  
註5 『阿志岐古墳群』 筑紫野市文化財調査報告書第7集 1982 筑紫野市教育委員会  
『阿志岐古墳群Ⅱ』 筑紫野市文化財調査報告書第12集 1985 筑紫野市教育委員会  
註6 『阿志岐シメノグチ遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1976 筑紫野市教育委員会  
註7 註2及び筑紫野市教育委員会の踏査による。  
註8 『鞭掛遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書第17集 1987 筑紫野市教育委員会

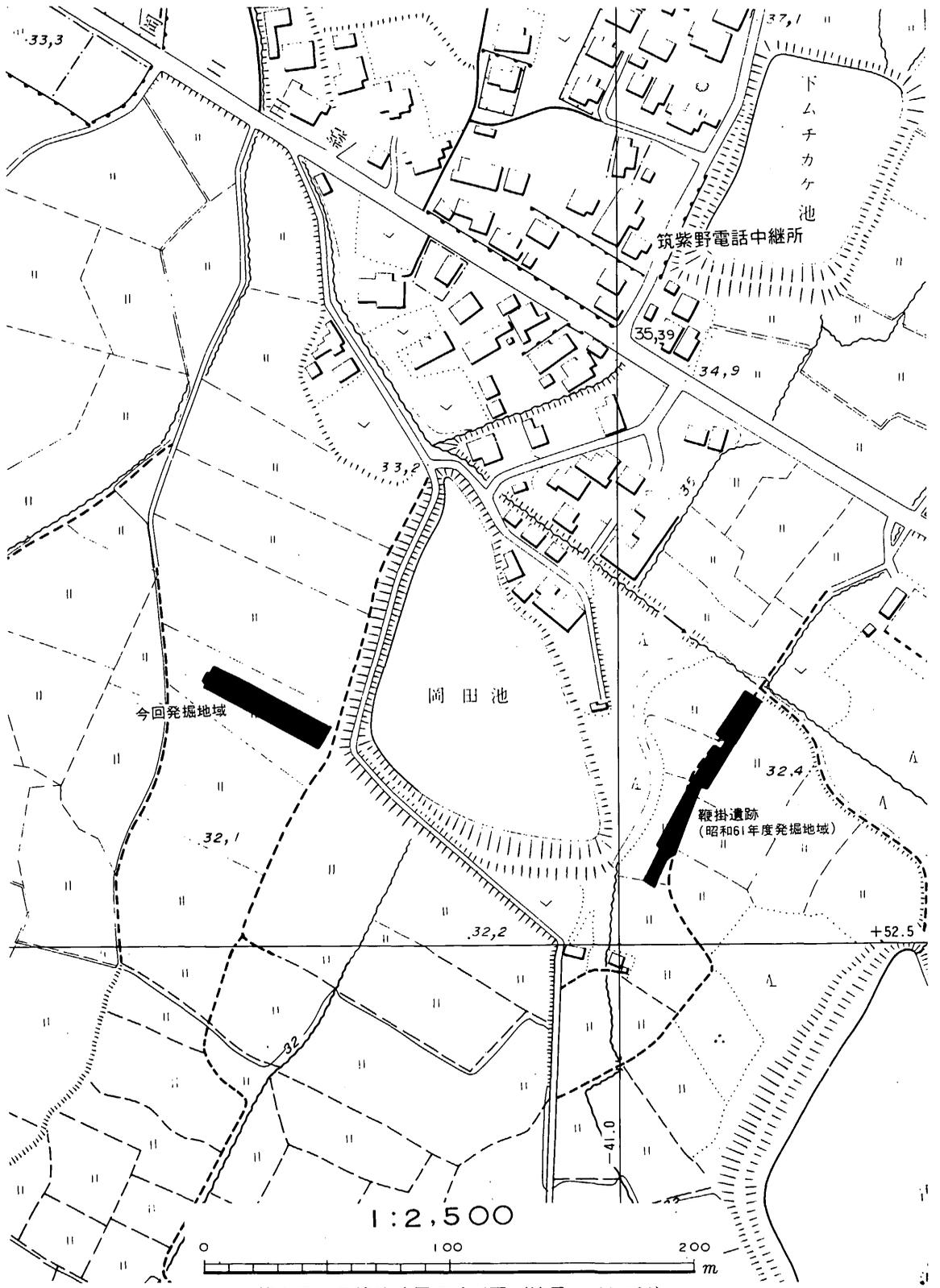


第1図 日焼遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺 1 / 25,000)

表1 第1図掲載遺跡地名表

番号	遺 跡 名	時 期 お よ び 性 格
1.	御笠地区遺跡C地点	古墳時代初頭集落跡
2.	御笠地区遺跡D地点	弥生時代終末～古墳時代前半集落跡／奈良時代堀立建物跡群
3.	御笠地区遺跡E地点	旧石器時代包含層／弥生時代終末～古墳時代初頭集落跡
4.	御笠地区遺跡F地点	弥生時代終末～古墳時代前半集落跡／弥生時代後期埋没大溝
5.	御笠地区遺跡G地点	弥生時代後期後半集落跡
6.	杉の谷古墳群	円墳（横穴式石室）3基
7.	阿志岐古墳群D群	未調査
8.	阿志岐古墳群B群	方墳（割竹形木棺）5基／円墳（横穴式石室）1基
9.	阿志岐古墳群C群	未調査
10.	脇道遺跡	〃
11.	宮崎遺跡	〃
12.	シメノグチ遺跡	縄文時代晩期住居跡／弥生時代中期墓地祭祀遺構
13.	阿志岐古墳群A群	円墳（竪穴系横口式石室）1基
14.	脇道古墳群	未調査
15.	老松神社古墳群	未調査
16.	天山古墳群	未調査
17.	日焼遺跡	今回調査
18.	鞭掛遺跡	弥生時代溝
19.	殿様塚古墳群	未調査

※ 「時期および性格」は発掘調査において確認された部分で、主体を占めたものについて記している。



第2図 日焼遺跡周辺地形図 (縮尺 1 / 2,500)

### III 調査の内容

#### 1. 調査概要 (第3図 図版1)

今回の日焼遺跡の発掘調査は、遺跡のほぼ南端の部分540㎡を発掘した。表土剝土時に調査担当者のミスで当初遺構が切り込まれている黒色土層下まで剝土したため1・2・4号住居跡や溝状遺構などの上部を失う結果になってしまった。本遺跡では前述の黒色土に切り込まれた遺構には黒っぽい灰色を呈す砂質土が詰まっている。竪穴式住居跡は4軒を検出したが、全体を発掘したのは2軒である。いずれも方形プランを呈すが、内1軒は張り出しをもつ。これら住居跡はいずれも調査区西側で検出した。溝状遺構は調査区中央から東側に7条を検出した。ほぼ南北に走るもの3条、北西から南東に走るもの4条がある。小ピット群の大半は、黒色土層下で検出されたものであるが、プランの周辺部がぼやけベース土壌との境が明確ではなく、形状も不整形であることから人為的なものではないと考える。

#### 2. 竪穴式住居跡の調査

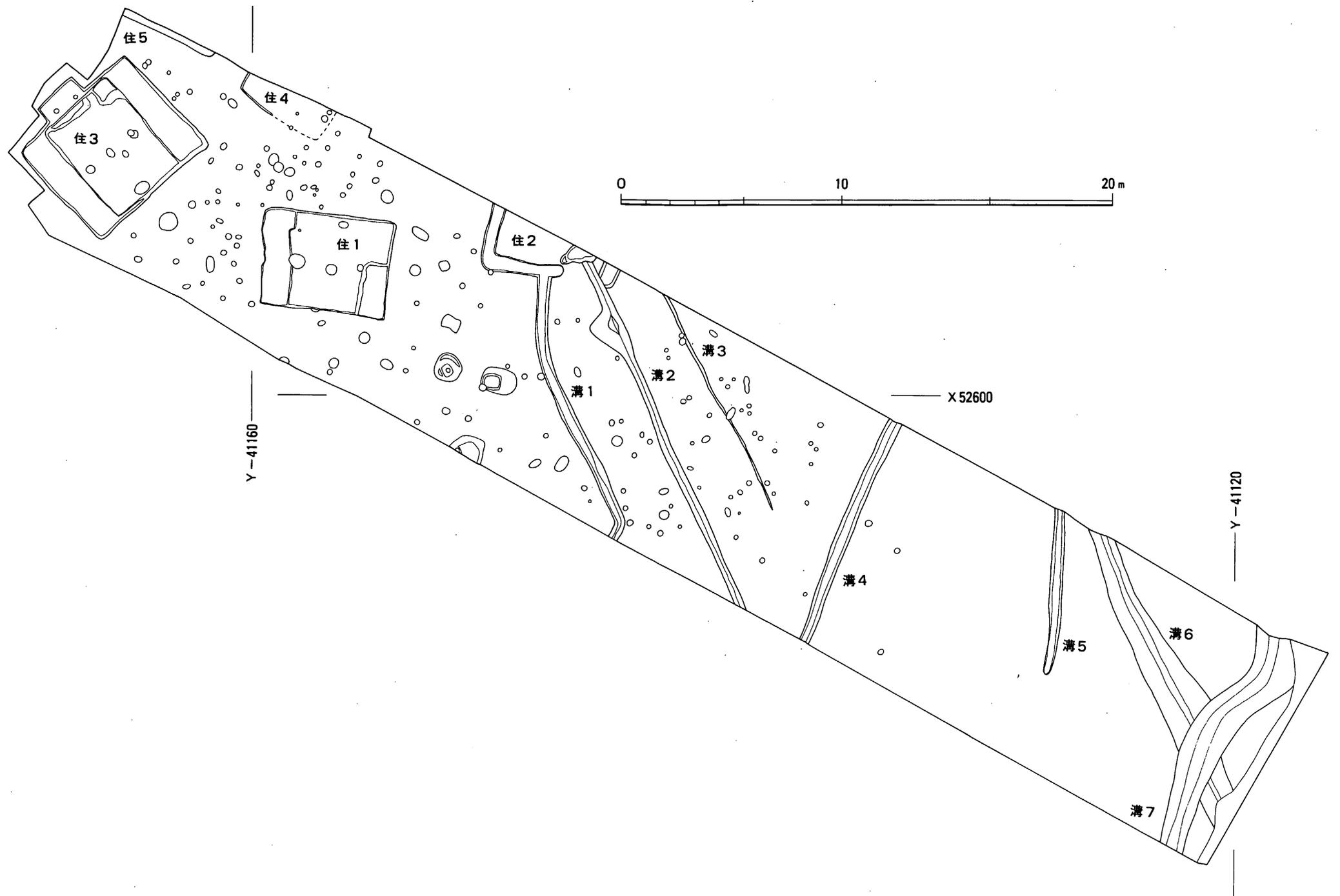
##### (1) 1号住居跡の調査 (第4図 図版2・3)

1号住居跡は5.4×3.9mの東西に長い長方形の平面プランを呈す竪穴式住居跡である。東側と西側の1/2に高さ10cmほどのベット状遺構をもつ。支柱穴は2本で、ベット状遺構の床面への落ち際から掘られている。柱穴は浅く、東側のもので27cm、西側のもので12cmを測り、東側の柱穴の方が比較的しっかりとした掘り方をもつ。炉は径45cm、深さ6cmほどで、柱穴間のほぼ中央、柱穴を結ぶ中心線よりやや北側にずれて設置されている。住居跡内には中央部を中心に、床面のほぼ直上に土器が投棄されていた。土器の大半は砕けているが、この土器のうち幾つかは、西から東方向、または南西から北東方向に投棄された状況を残すものがみられた。

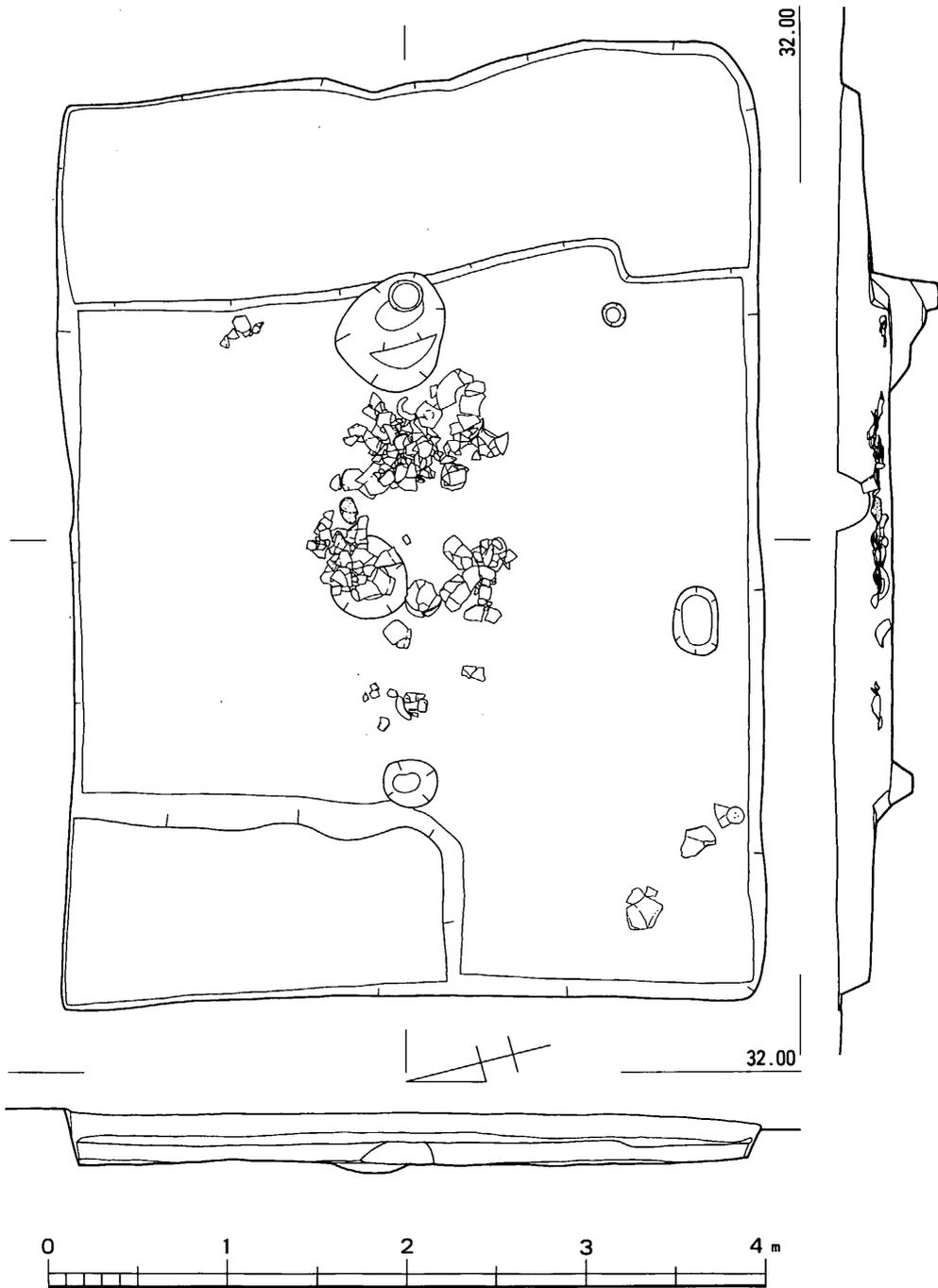
##### 出土遺物 (第5～14図 図版7～10)

##### 土器 (第5～13図 図版7～10)

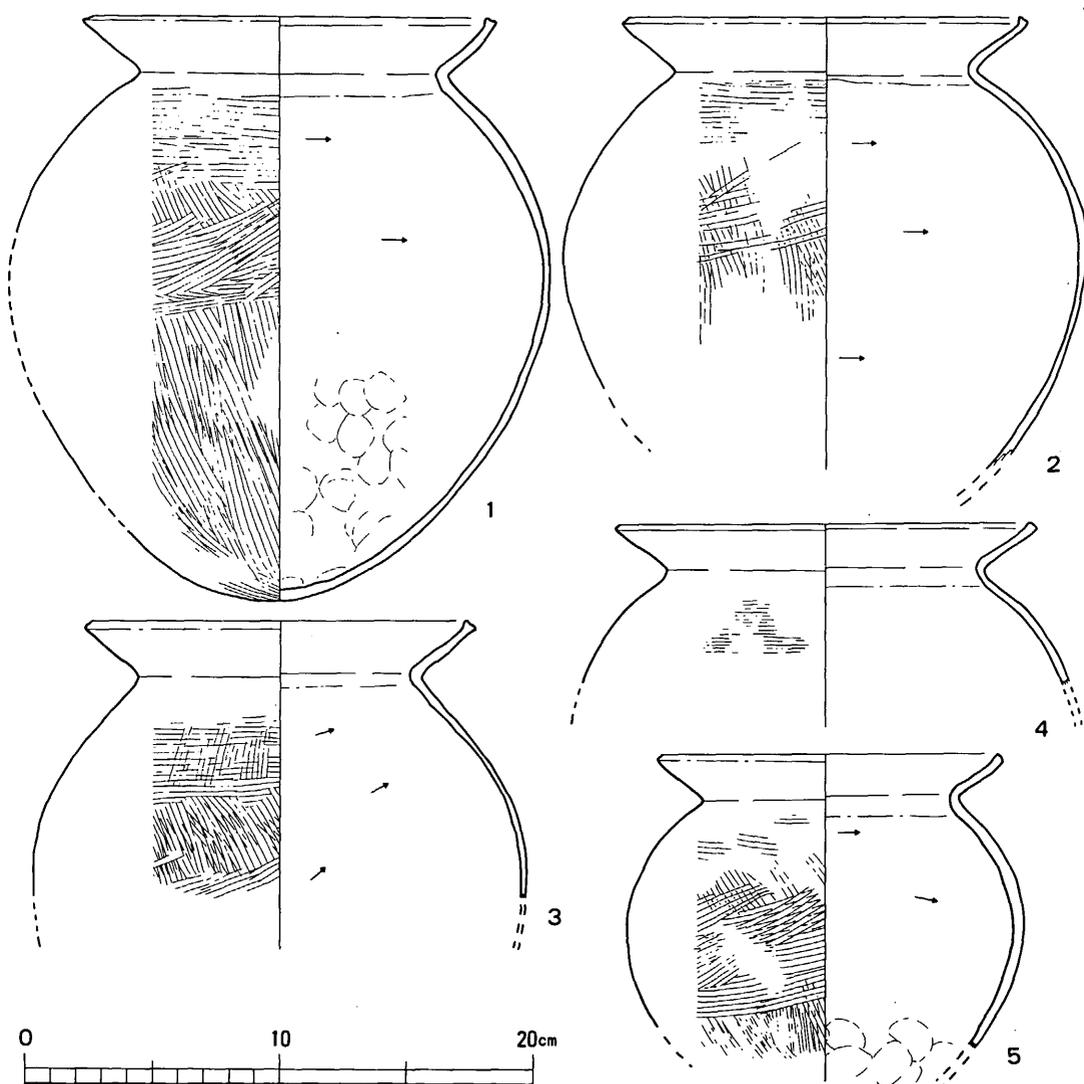
1～5は畿内系の甕で、わずかに口縁部が内彎しながら外方へ延び、体部との境はあまい。口唇部は肥厚するが、1～3が摘み上げが明瞭であるのに対し、4・5は口縁部上位をヨコナデすることにより口唇部にあまい肥厚部を作り出している。体部は1が上位に最大径をもつ球状を呈し、2・4も1と同様の形状をもつと考えられる。また3は中位に最大径をもつ球状を、5はほぼ球形を呈すと考えられる。調整は口頸部が内外面ともにヨコナデされる。体部内面は頸部直下(5～10mm下)から丁寧なケズリが施され、底部、または付近が確認できる1と5には指頭痕が認められた。体部外面は調整が明瞭に観察できない4を除き縦方向の刷毛目後、肩



第3図 日焼遺跡遺構配置図 (縮尺1/200)



第4图 1号住居跡実測図（縮尺1/40）



第5図 1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）

部と最大径位に横方向の刷毛目が施される。

6は二重口縁をもつ短胴の甕である。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は丸く収まる。体部は上位に最大径をもち、座りのよい底部に至る。調整は1～5の甕と共通する。口頸部内外面がヨコナデされる。体部外面は縦方向の刷毛目後、頸部下と最大径位に横方向の刷毛目が施され、さらに体部と底部の境にも境に沿って刷毛目が施される。体部内面は頸部直下から丁寧なケズリが施される。

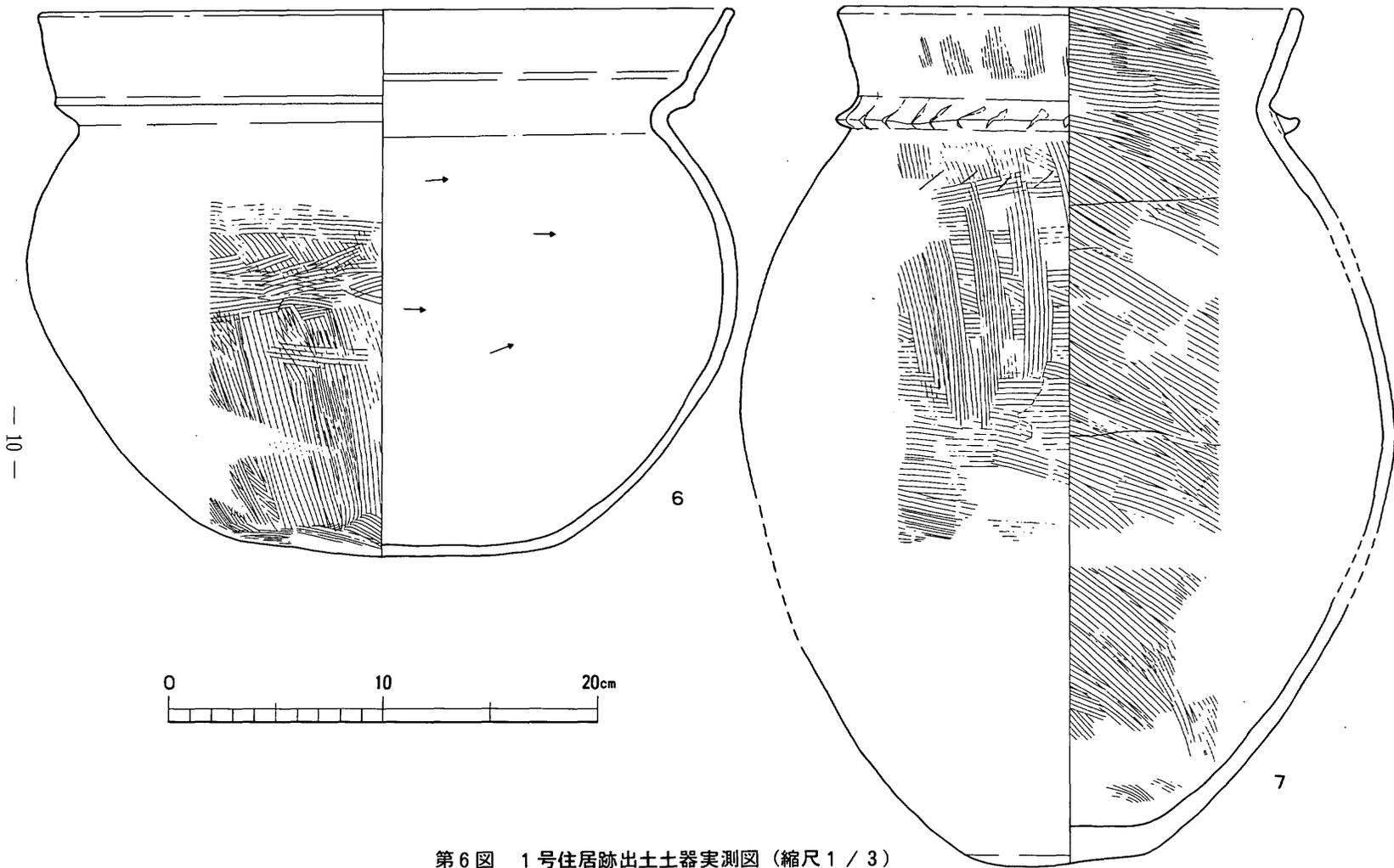
7～12は長胴の甕で、7は他の甕より一回り大きい。7は口縁部が直線的に外傾し、頸部に

刻み目凸帯を巡らす。体部は、ほぼ中ほどに最大径をもち、底部はあまいレンズ状を呈す。外面調整は口縁部が縦方向の刷毛目、体部上半部が横方向の刷毛目後、縦方向の刷毛目を施す。体部下半は、横方向の刷毛目後、縦方向のケズリを施し、さらにその上をナデるが、底部付近はケズリが残る。内面調整は口縁部を横方向、体部を斜方向の刷毛目を施す。また体部凸帯下には、凸帯にヘラで刻みを施した際についたヘラの痕が残る。8は外反する口縁部をもち、口唇部は平坦面を有す。調整は外面体部は粗いタタキが施され、その後、口頸部に刷毛目、体部下半に刷毛状工具によるケズリが施される。内面はすべて刷毛目調整される。体部中位には煤が付着し、下位には赤変もみられる。9～12は直線的に外傾する口縁部を呈すもので、9・11・12は体部下半を欠失する。9は体部の張りがやや強い。残存部の調整は刷毛目で調えられ、口唇部周辺はヨコナデで仕上げられるが、12の体部には刷毛目の下にタタキが認められる。10の底部付近は刷毛目をナデ消している。また、9の体部中位、11の口縁部から体部上位に煤の付着と、9の体部下位に赤変がみられる。13～16は小型の甕である。13は口縁部が短く外傾し、体部中位に最大径をもつ。底部は丸底を呈す。口頸部内面は指頭痕が残り、外面にはヘラで整形した痕が残る。体部外面上半は刷毛目が施され、下半から底部はヘラケズリされる。内面は全体に刷毛目調整され、底部は放射状にヘラ状工具でスリナデされる。14～16は口縁部が短く外傾し、体部上位に最大径をもつ。15は体部中位から、16は体部下位から下を欠失するが14は丸底を呈す。いずれも口縁部から体部上半の内外面はヨコナデ、またはナデが施されるが、15の肩部には凶化部分のみにヘラ状工具によるスリナデがみられた。体部下半は14・15とも刷毛目が施され、14の底部はヘラケズリされる。体部下半から底部は、14がヘラケズリ後、ナデが施される。16は粗くヘラケズリされる。

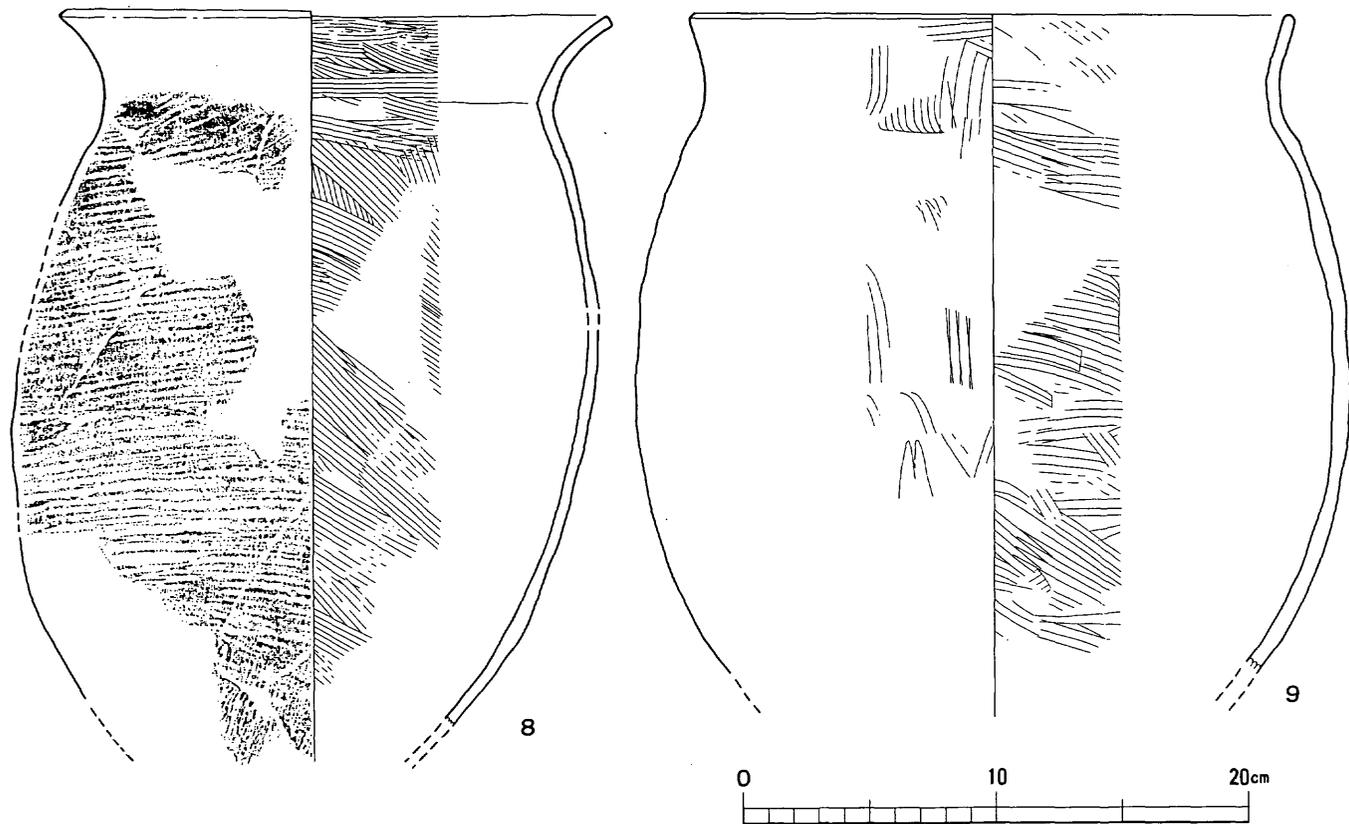
17・18は丸底を呈す短頸壺で、口縁部はやや外傾する。17は小型のもので体部はほぼ球形を呈す。口頸部内外面はヨコナデされ、体部外面上半と体部内面はナデが施される。体部外面下半はヘラケズリされる。18は17に比べやや大きく、体部は僅かに長胴気味となる。調整は全体に刷毛目が施されるが、体部外面上位と体部内面は丁寧に刷毛目をナデ消している。19は口頸部を欠失するが、長頸壺と考えられる。体部上位に最大径をもち、底部は尖り気味の丸底を呈す。体部外面上半と体部内面は刷毛目調整されるが、体部外面下半は胎土がやや乾いた段階で、刷毛状工具により波状にスリナデを施している。

20は小型丸底壺である。残りが悪く、プロポジションから推定復原した。球形の体部に器高の20%を占める短い口縁部をもち、口縁部はほぼ直線的に外傾する。胎土は精製されたもので、器壁も薄く、全体に丁寧な作りである。全体に刷毛目調整した後、口縁部と体部内面にはナデ、またはヨコナデを施し、体部外面上半はミガキを施す。体部外面下半は丁寧なヘラケズリを行っている。

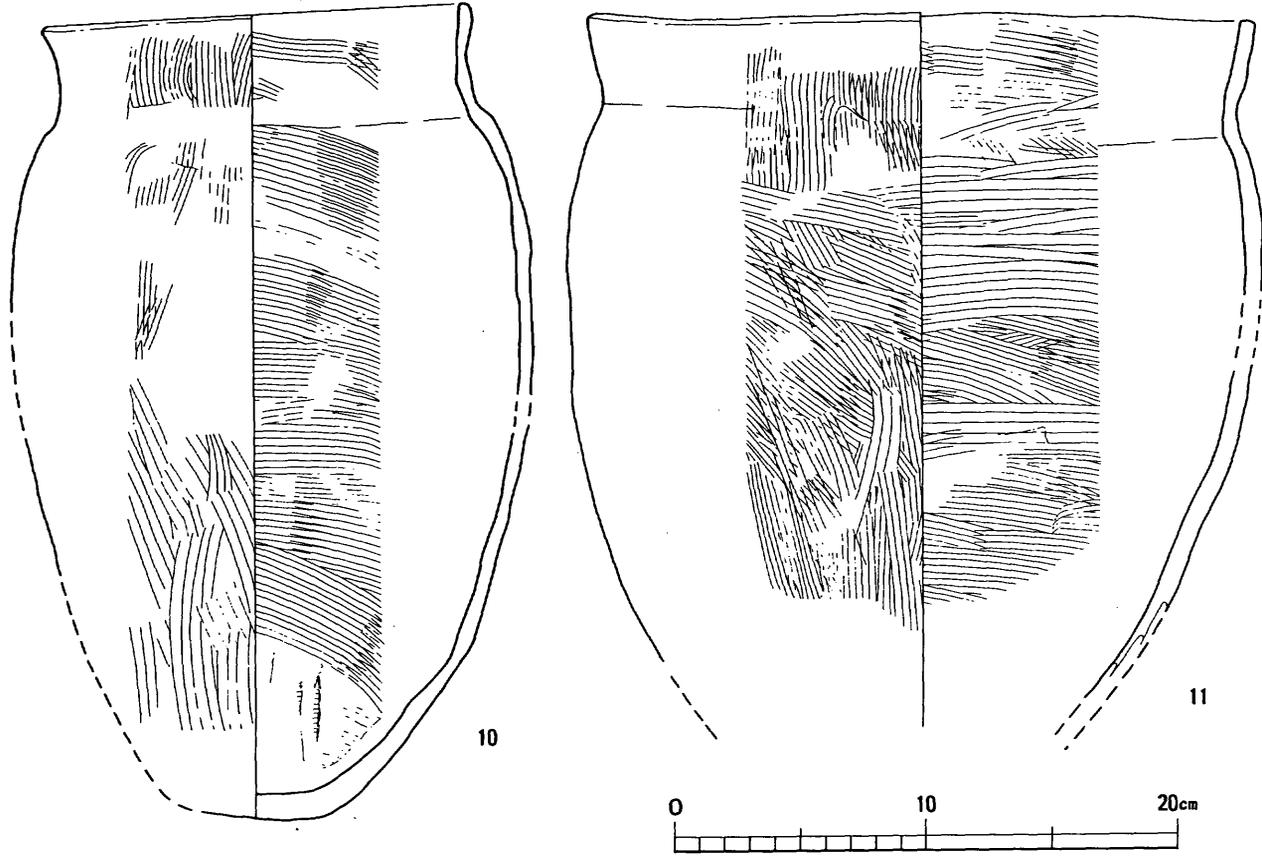
21～23は小形丸底鉢である。内彎しながらすぼまる扁球形の体部をもち、いずれも口縁部高



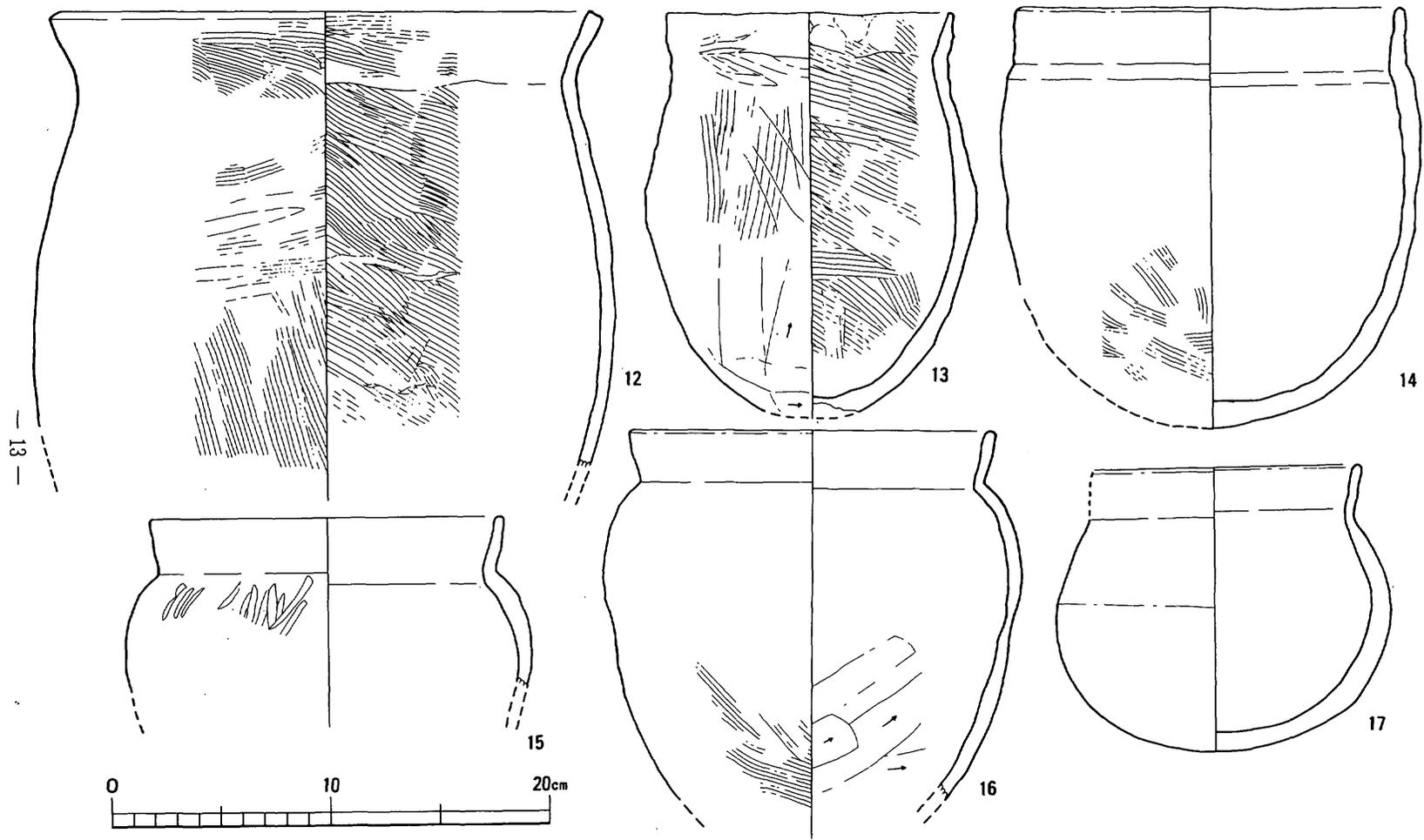
第6图 1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)



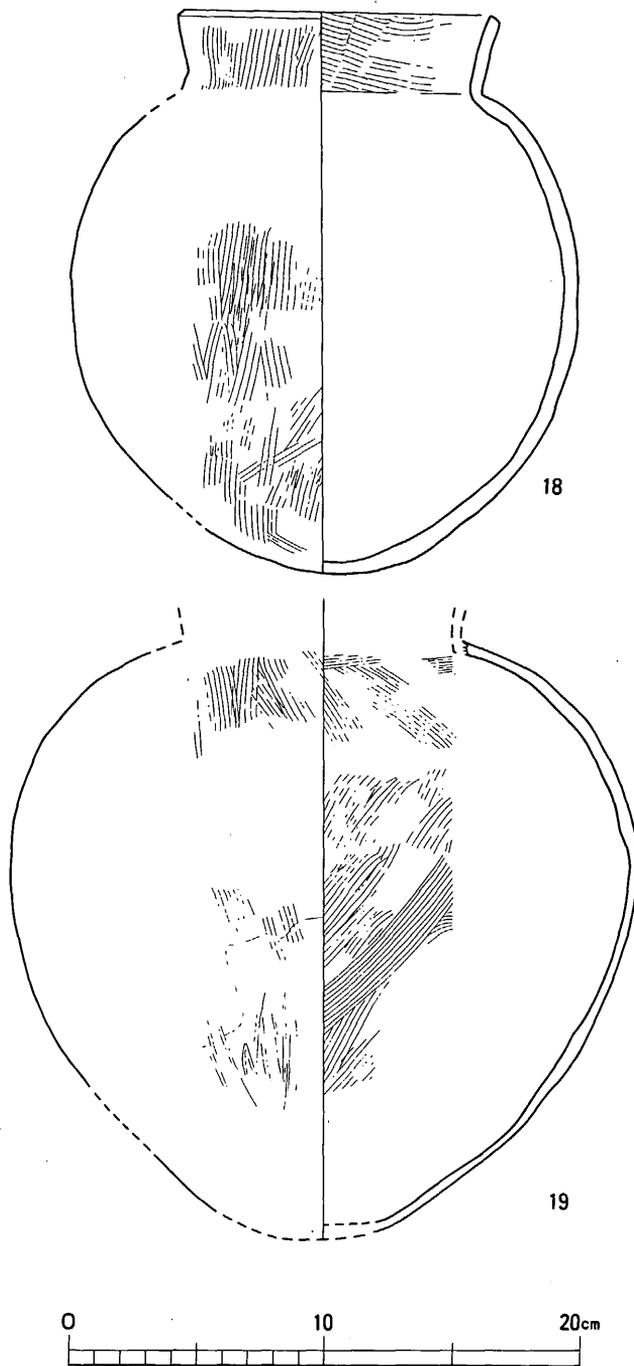
第7图 1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）



第8图 1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）



第9图 1号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

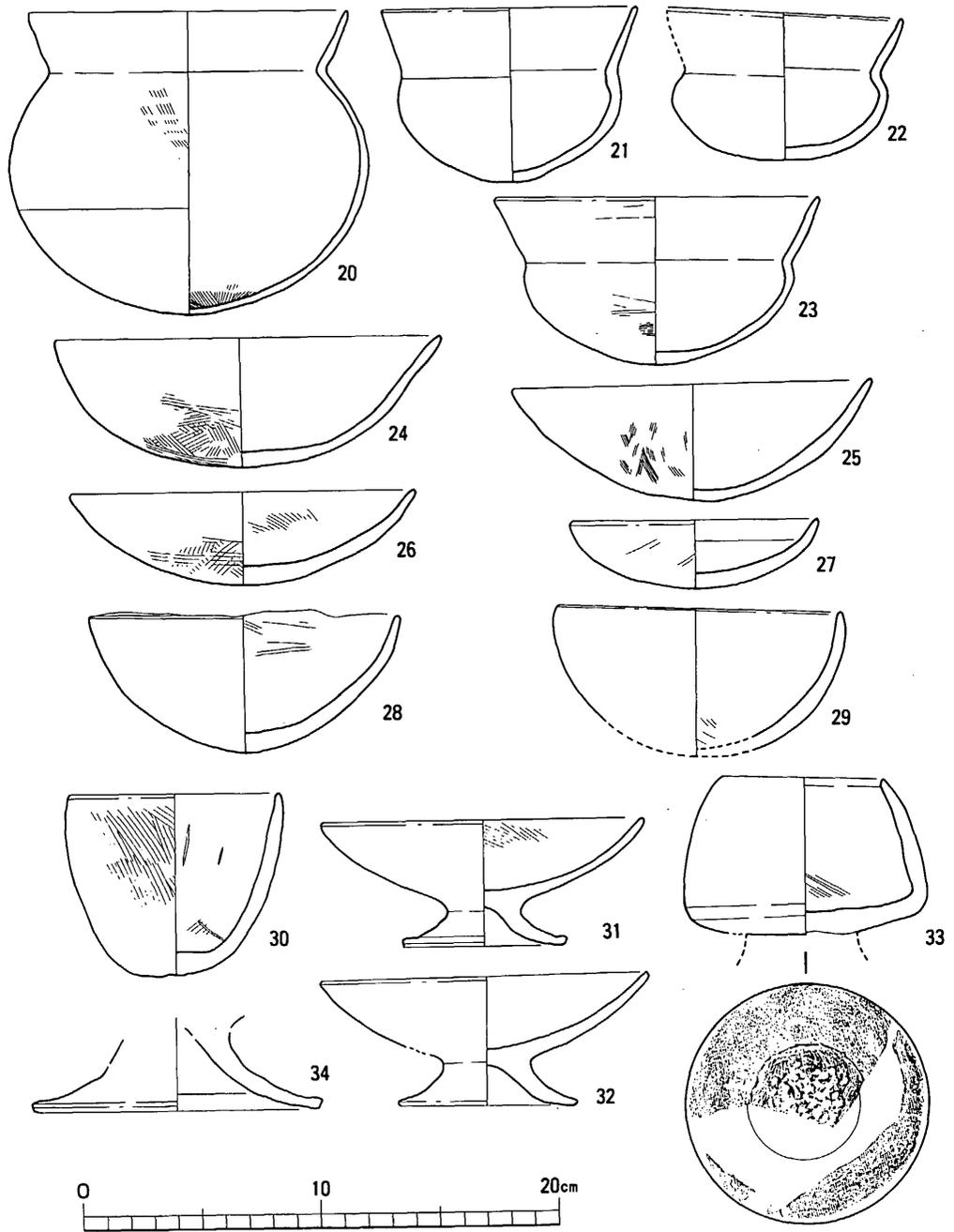


第10図 1号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1 / 3)

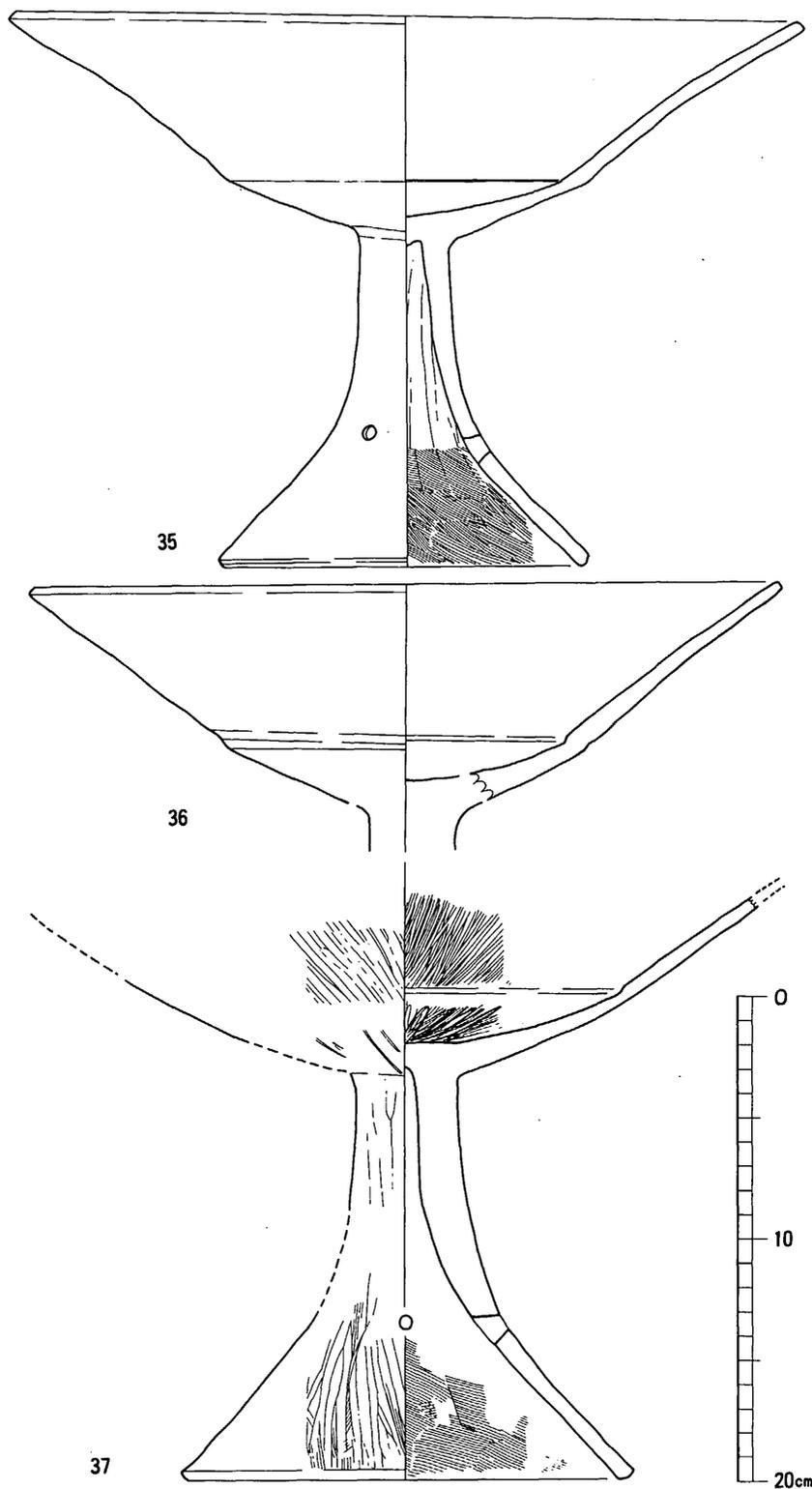
は器高に対しほぼ40%を占める。調整は摩滅等で不明瞭であるが、20の小形丸底壺に比べると全体に作りが悪く、胎土も一般的である。

24~32は鉢で、24の口縁欠失部の際に、僅かに歪んだ部分が認められ、片口をもつ鉢と推定される。また31・32は脚台をもつ鉢である。27は他のものに比べ法量が小さい。これらの鉢はいずれも丸底で、内彎しつつ延びる体部をもつが、器高が口径の $\frac{1}{4}$ 程度のもの(26・27)、 $\frac{1}{3}$ 程度のもの(24・25)、 $\frac{1}{2}$ 程度のもの(28・29)、器高が口径に迫るもの(30)、に分けられ、31・32の鉢部分も26・27と同様の形態を呈す。調整は刷毛目後、ナデまたはヨコナデで仕上げられる。

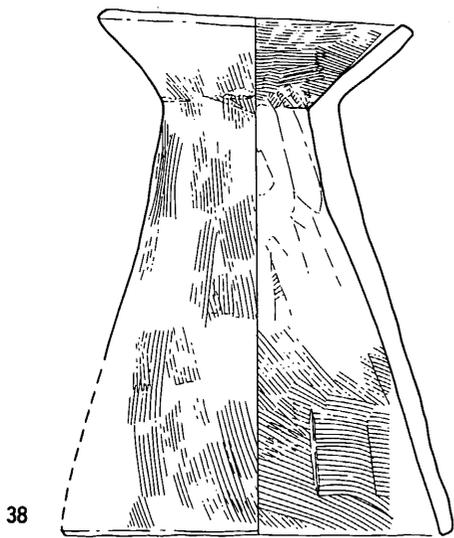
33は体部下位から屈曲して内傾しつつ延びる坏に脚台が付くものである。器壁は厚いが、精製された胎土を用い、外面はミガキが施され、内面は体部下半に刷毛目が残るものの丁寧にヨコナデされる。また、脚台との接合部は粘土のなじみ



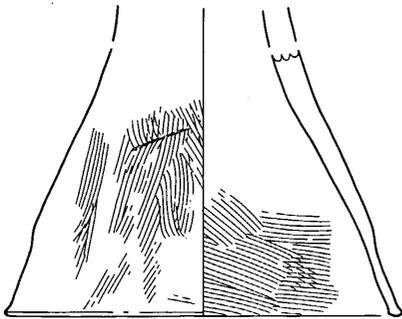
第11图 1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)



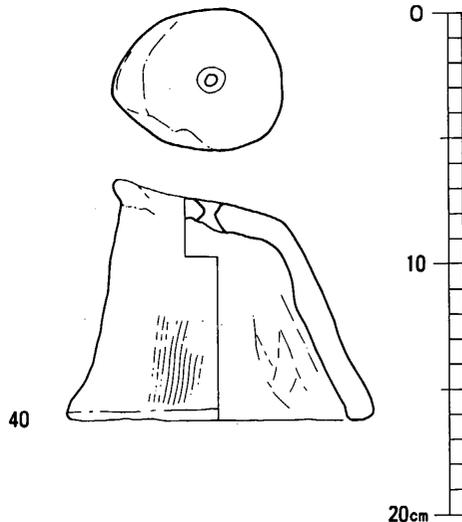
第12图 1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）



38



39



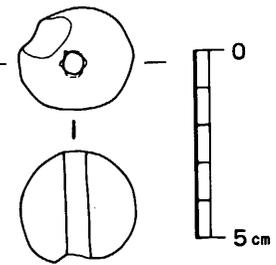
40

を良くするために径2mmほどの棒で40前後の穴をあけている。34は脚台部分である。外面裾部はナデ、端部周辺はヨコナデされ、内面上半はケズリが施される。

35~37は高坏である。35はほぼ完形に復原しえたが、36は脚部を、37は口縁部を欠失する。いずれも体部で屈曲し、口縁部は外傾し大きく延びる。屈曲部は内外面にあまい段状を呈す接合面を有すが、全体に外面の屈曲部は明瞭さを欠く。特に37の外面屈曲部はかろうじてその痕跡を残す程度で、体部上半と下半はほぼ一体化する。また口縁部は35が外反するのに対し、36は直線的である。調整は35・36が摩滅のため不明瞭であるが、いずれも外面と坏部内面は刷毛目調整後、丁寧にミガキを施したものと考えられる。脚部内面は筒部はヘラによる調整、裾部は刷毛目調整を施す。脚部の穿孔は35は3穴、37は1穴しか残存していないが、残存部の状況からみて3穴であろう。

38~40は器台である。38は脚部が円錐状に立ち上がり、屈曲して受部を形成する。外面全体と内面受部・脚部下半は刷毛目調整され、脚部上半は縦方向にナデ調整される。39は脚部中位以上を欠失するが、38と同様の形態を呈すと思われる。40は杓形器台といわれるもので、受部は傾斜する。つまみの部分は小さく、頂部穿孔径は5mmほどである。脚部下半に刷毛目を残すが、脚部上半から受部はナデで仕上げられる。内面は強いナデを施す。

土製品 (第14図)  
直径約3cmの球状を呈す小玉で、径5~6



第13図 1号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/3)

mmの孔が中心を貫く。第14図 1号住居跡出土土製品実測図 (縮尺1/2)

## (2) 2号住居跡の調査 (第15図 図版3・10)

1号住居跡の西側で検出した。住居跡の2/3程度は調査区外である。剝土の際のミスから住居跡の基部しか確認出来なかったが、南側の一边が5.7mほどの方形プランを呈す竪穴式住居跡である。

## (3) 3号住居跡の調査 (第15図 図版4)

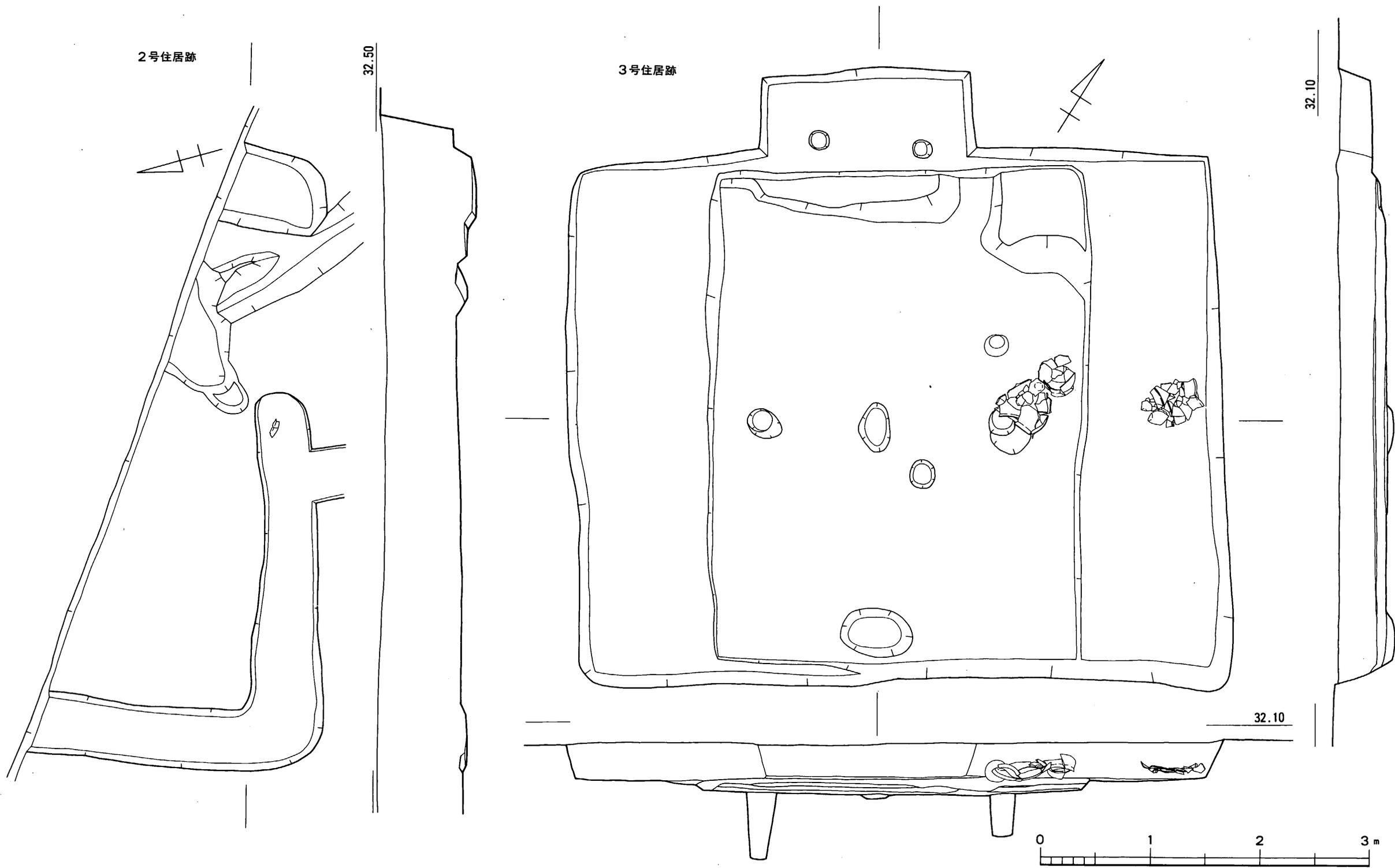
調査区の西端で検出した。6×4.9mを測る長方形プランを呈し、北西辺の中央に3×1mほどの張り出しをもつ。張り出し部床面は、住居跡床面より15cmほど高く、さらに住居跡内部に幅25cmほどの段をもつ。この段の西隣にも幅約60cm、高さ5cmほどの段があり、ベット状遺構へ続く。住居跡内の北東辺と南東辺に平行に幅5~60cm、高さ10cmほどのベット状遺構が設けられる。支柱穴は2本でベット状遺構からやや離して掘り込まれ、深さはそれぞれ61、41cmを測る。柱穴間のほぼ中央に45×28cmの略楕円形を呈す炉が設けられている。深さは4cmを測る。張り出し部にも柱穴状のピットがみられるが、深さ2~3cmで明瞭でない。張り出し部と反対側の壁下には65×45cm程の楕円形を呈す深さ9cmほどの小土壌がある。住居跡内からは、床面からやや浮いて完形、または潰れた状態で土器が出土した。また柱穴脇の潰れた土器の下から小形仿製鏡が出土した。

## 出土遺物 (第16・17図 図版扉・図版11)

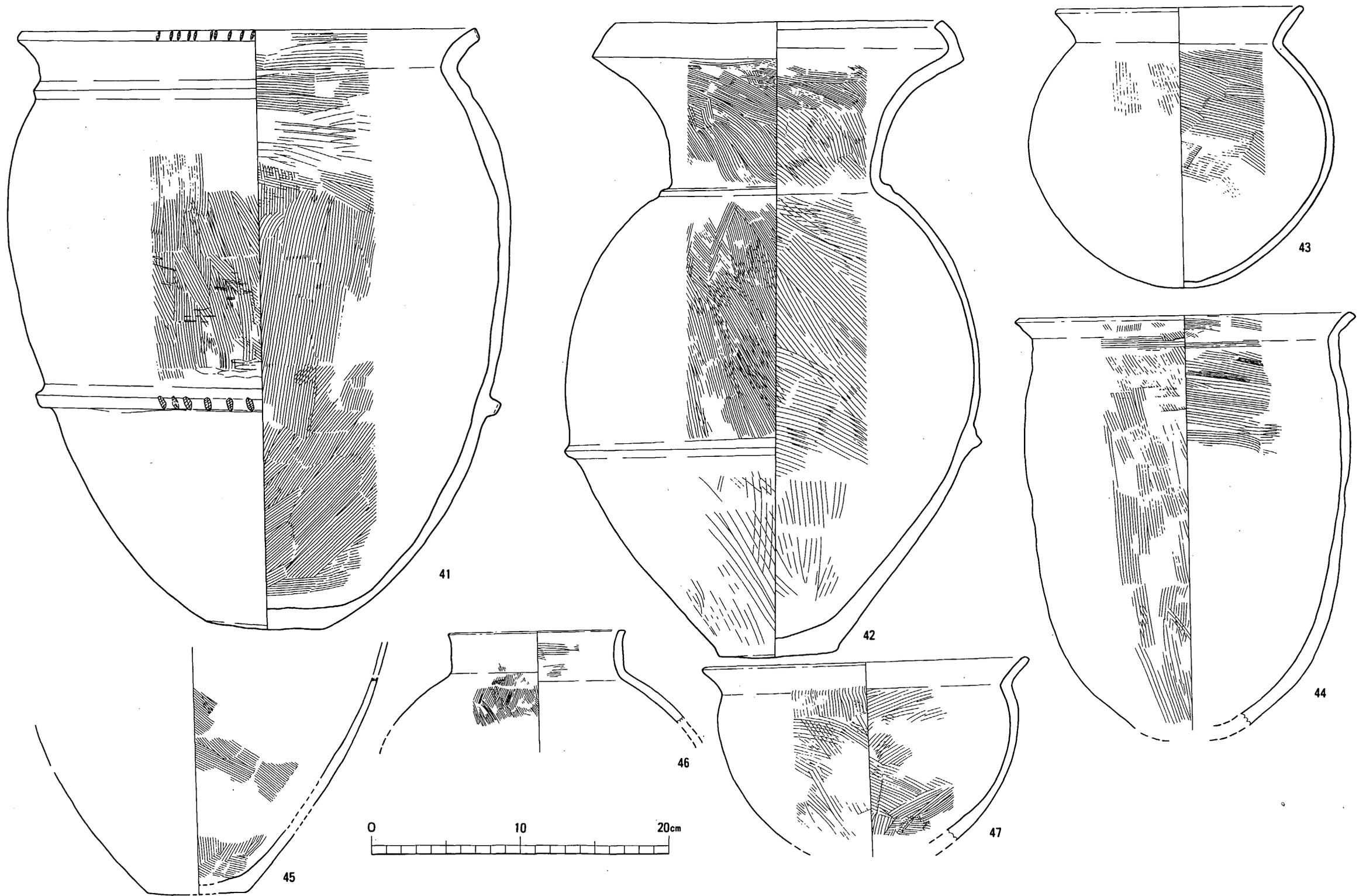
### 土器 (第16図 図版11)

41・43・44は甕である。44は口縁部が短く外反し、体部上位に最大径をもつ。底部はレンズ状を呈す。頸部に三角形、体部下位にコの字形の凸帯をもち、口唇部とコの字形凸帯に刷毛状工具による刻み目を入れる。外面体部上半の刷毛目の下にタタキ痕が認められる。刷毛目は全体に入れられた後、外面口頸部や口唇部周辺はヨコナデする。またコの字状凸帯下はへら状工具により刷毛目を丁寧にナデ消す。また、内面底部周辺は強いナデが施される。43は口頸部がく字状を呈し、体部中位に最大径をもつ。調整は器面が摩滅しており明瞭さを欠くが、体部は内外面ともにキメの細かい刷毛目が施され、外面体部下半はへら状工具で丁寧にナデ消される。口縁部はヨコナデされる。44は短い口縁部が外傾し、体部はほとんど張らずに底部に至る。外面は全体に縦方向の刷毛目が入れられ、頸部はさらに横方向の刷毛目が施される。内面は体部上位まで横方向の刷毛目が認められるが、以下はナデで仕上げられる。外面下半は赤変し、上半は煤が付着する。また内面下半は器面が荒れる。

42は二重口縁壺で、口縁部は短く、内彎し、内傾する。頸部は太く、底部はレンズ状を呈す。肩部と体部の最大径下に三角形の凸帯をもつ。口縁部がヨコナデで仕上げられるほかは、すべて刷毛目が残る。46は短頸直口壺である。短い口縁部は直立し、口唇部付近で僅かに外傾する。体部上位の一部しか残存していないが、球状を呈すと思われる。器面は摩滅しており明確では



第15图 2号・3号住居跡实测图 (縮尺1/40)

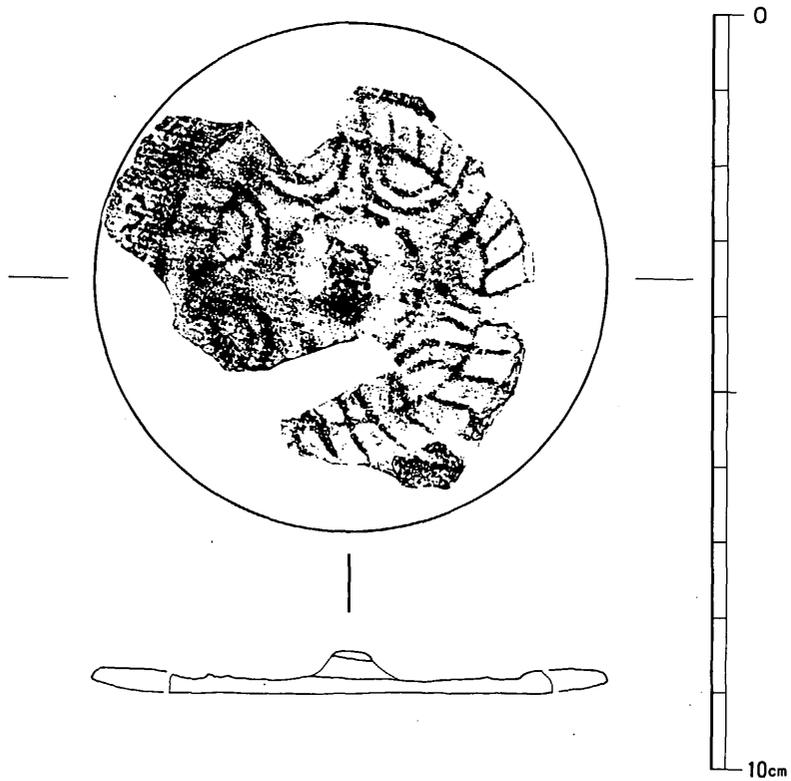


第16图 3号住居跡出土土器実測図(縮尺1/3)

ないが、外面と内面口縁部は刷毛目が施され、さらに口縁部はヨコナデされている。体部内面は指頭痕のみ確認できた。47は鉢で、底部を欠失する。口縁部は外傾し、体部は僅かに張る。外面体部と内面は刷毛目が施され、口縁部はヨコナデされる。

仿製鏡（第17図 図版扉）

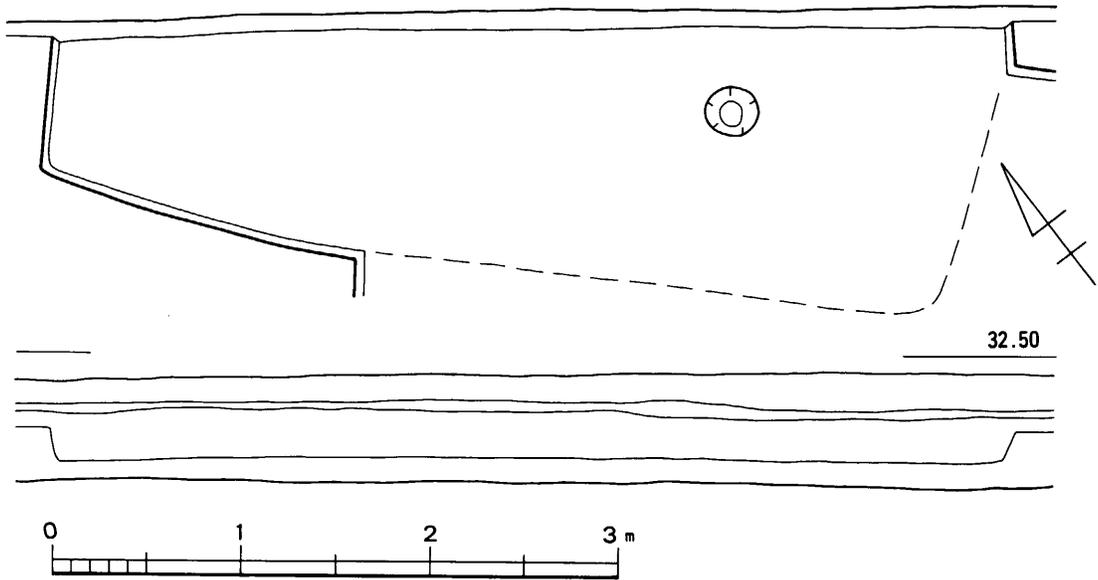
検出の際に欠損したが、面径は6.8cmを測る完形品の小形仿製鏡であったと推定される。背面は幅1cmの平縁の内側に目の粗い斜行櫛歯文帯、双線で表出された7弧の内行花文帯を巡らし、一圈を経て鈕に至る。铸上りは小型仿製鏡としては良好な部類に入り、背面には丹と思われる赤色顔料が塗布される。



第17図 3号住居跡出土仿製鏡実測図（縮尺1/1）

#### (4) 4号住居跡の調査 (第18図)

1号住居跡の北側で検出した。2/3ほどは調査区外に延びる。一部を剥土の際に消失したが、調査区内の一边が4.8mほどの方形プランの竪穴式住居跡である。床面までは15~17cmを測る。



第18図 4号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

#### 出土遺物 (第19図 図版11)

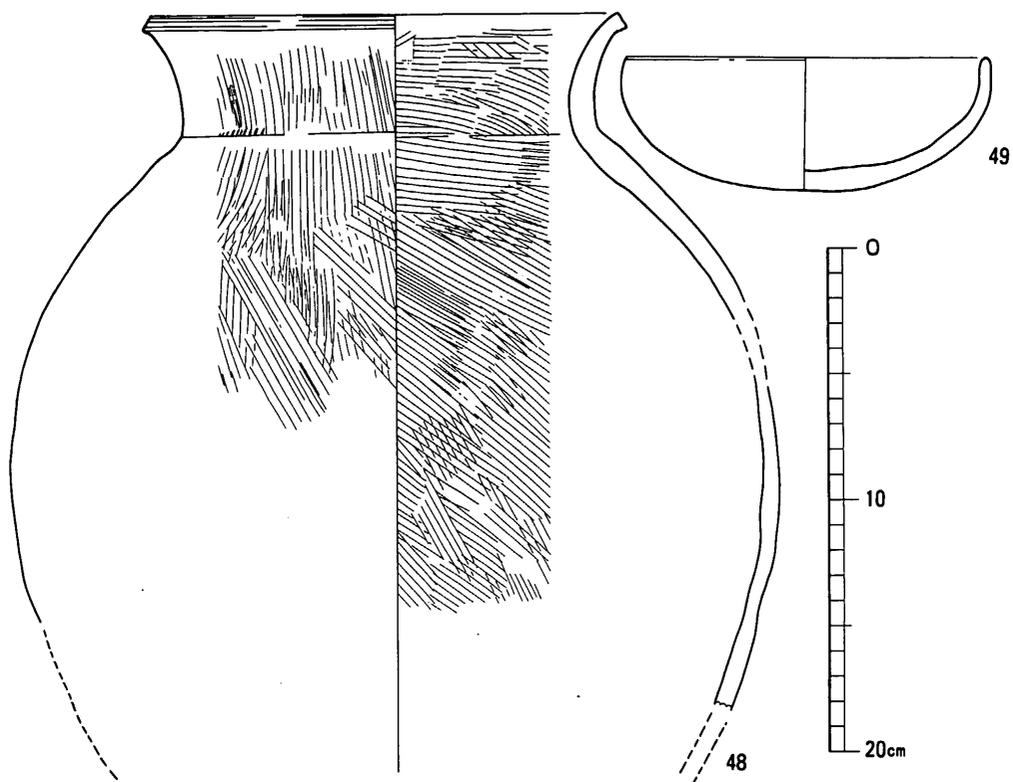
##### 土器

48は壺で、短い口縁部は外反し、体部は長胴気味の球形を呈す。内外面とも刷毛目が施されるが、外面体部下半は焼成後の加熱により、器面の剥落が見られる。

49は鉢で丸底の底部から内彎しつつ延びる体部をもち、器高は口径の1/3程度である。調整は明確ではないが、外面体部下半はケズリが施され、体部上半の一部にミガキの痕跡を残す。

#### (5) 5号住居跡の調査

3号住居跡の北側で検出した方形プランの竪穴式住居跡である。南側コーナーとそれに続く壁部の一部プランを確認したが、今回の工事による影響が無いと判断したため発掘は行わなかった。



第19図 4号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）

### 3. 溝状遺構の調査

#### (1) 1号溝状遺構の調査

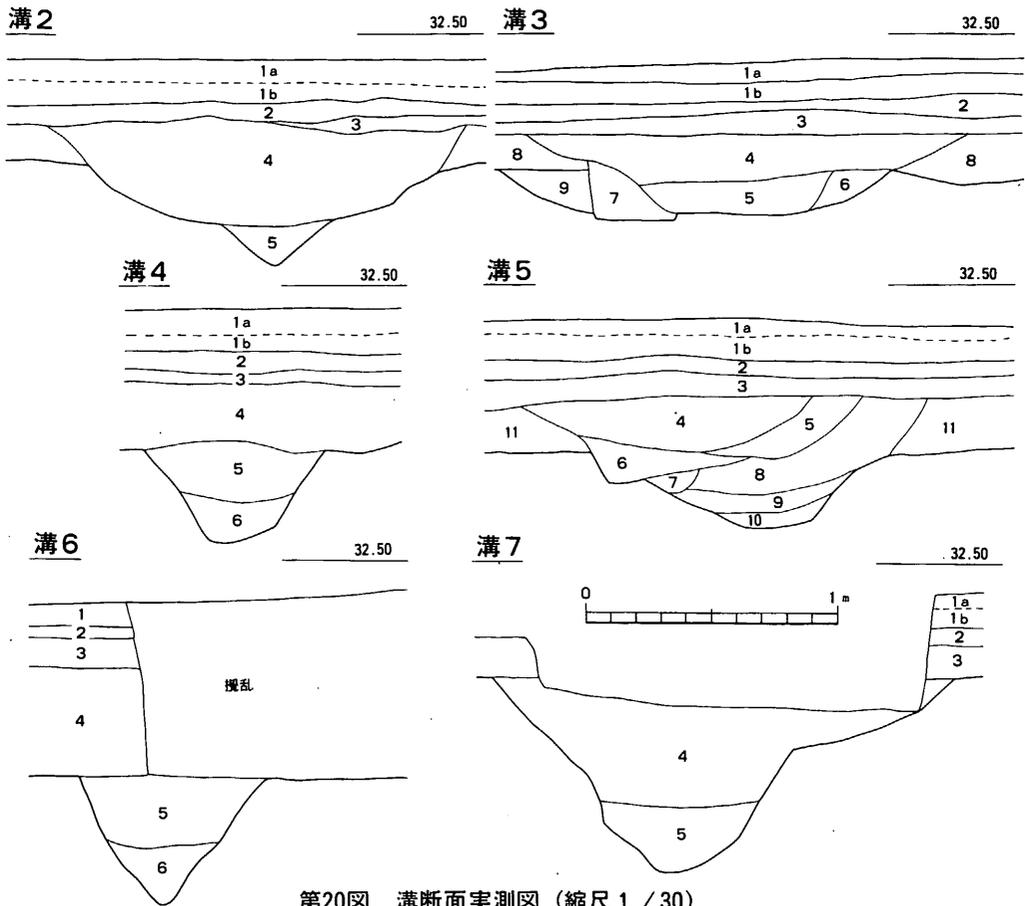
緩やかなカーブで2号住居跡切った後、ほぼ真北線上を走り調査区堺で西におれる。

#### (2) 2号溝状遺構の調査（第20図 図版5）

1号溝状遺構の東側2.5mを南北に走る。調査区域内ではほぼ直線で、真北から東側に10°振る。一部で溝幅が不規則に広がる部分もあるが、調査区南側では幅1.65mを測る。断面はゆったりとした碗状を呈し、中心部4～50cmがさらに逆三角形状に掘り込まれる。碗部には粗い砂、さらに掘り込まれた部分にはキメが細かい砂が詰まっていた。

#### (3) 3号溝状遺構の調査（第20図 図版5）

2号溝状遺構の3m東側を平行に走る幅1.8mほどの溝状遺構で、掘り込まれた層も2号と



第20図 溝断面実測図 (縮尺 1 / 30)

表2 溝状遺構土層観察表

2号溝状遺構	
1 a層	青灰色耕作土層
1 b層	淡青灰色耕作土層
2層	1 b層土+淡赤褐色土 (耕盤)
3層	灰色耕作土層
4層	暗灰色粗砂層 (6層土がやや多く混じる)
5層	黄褐色砂層 (キメがこまかい)
6層	黒灰色砂質土層
3号溝状遺構	
1 a~3層	2号溝状遺構と同じ
4層	暗褐色粗砂層
5層	黄褐色粗砂層
6層	暗灰色砂質土層 (キメが比較的細かい)
7層	暗灰色粗砂層 (4.5層よりややキメが細かい)
8層	黒灰色砂質土層
9層	" (灰色味がやや強く、キメが細かい)

4号溝状遺構	
1 a～3層	2号溝状遺構と同じ
4層	3号溝状遺構の8層と同じ
5層	黒灰色砂質土層（僅かに褐色味がある）
6層	3号溝状遺構の9層と同じ
5号溝状遺構	
1 a～3層	2号溝状遺構と同じ
4層	黒灰色砂質土層
5層	淡青灰色砂質土層（極めてキメが細かい）
6層	青灰色砂層
7層	暗灰色砂層
8層	灰色砂層
9層	青灰色粘質土+8層土
10層	淡灰色砂層
11層	3号溝状遺構の8層と同じ
6号溝状遺構	
1 a～3層	2号溝状遺構と同じ
4層	3号溝状遺構の8層と同じ
5層	灰褐色粗砂層（粗砂としてはキメが細かい方）
6層	灰色砂層（極めてキメが細かい）
7号溝状遺構	
1 a～2層	2号溝状遺構と同じ
3層	3号溝状遺構の8層と同じ
4層	淡灰色砂層（ややキメが粗い）
5層	暗青灰色砂層（ややキメが粗い）

同じである。断面では西側にあまい段をもつが、これは部分的なものであろう。埋土は粗い砂である。この溝状遺構に切られた断面方形に近い逆台形を呈する遺構や一層下の層から掘り込まれた断面腕状の遺構も検出し、溝状遺構と考えられるが、今回の調査では明確にしえなかった。

(4) 4号溝状遺構（第20図 図版5）

北東から南東に調査区を横切る。2号、3号溝状遺構より一層下の層から掘り込まれる。断面は逆台形を呈し、上面幅は7～80cmを測る。埋土は黒灰色の砂質土である。

(5) 5号溝状遺構（第20図 図版6）

4号溝状遺構の東側を北東から南東に走り、幅は1.8mほどである。断面は開角の広いV字状を呈し、7層が観察された。埋土は砂、砂質土を主体とするが一部に粘質土も混ざる。

(6) 6号溝状遺構（第20図 図版6）

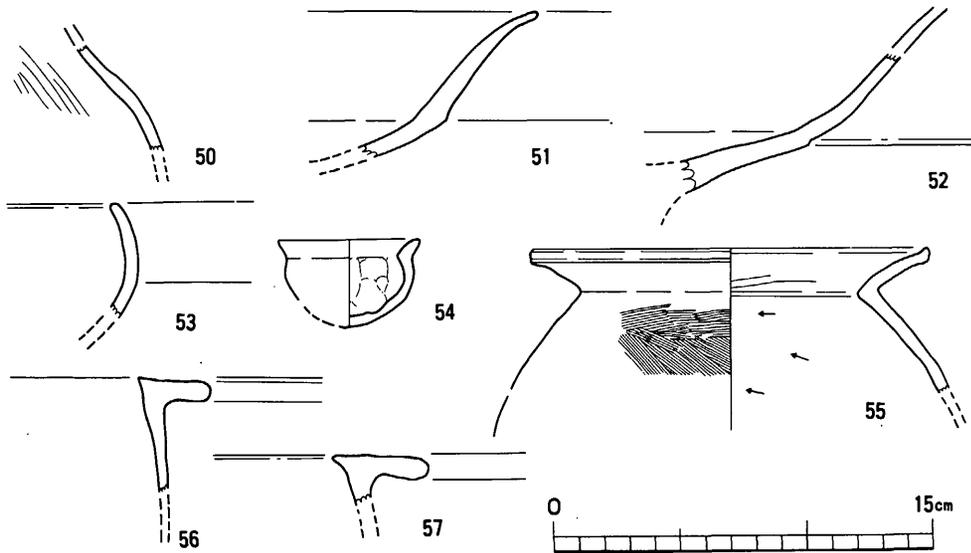
南北に走る溝状遺構である。幅は場所によりかなり異なるが、最大2mを測る。断面はV字状を呈し、上部に粗砂、下部にキメが細かい砂が堆積する。

(7) 7号溝状遺構 (第20図 図版6)

6号溝状遺構を切って北東から南西に走る溝状遺構である。検出した部分はやや蛇行している。断面はU字状を呈し、やや粗い砂が埋まっていた。

(8) 溝状遺構出土遺物 (第21図)

50・51は3号溝状遺構から出土した。50は床面から出土した小壺の体部から頸部に至る付近の小片である。器面は摩滅しているが、体部と頸部の境にはあまい段をもち段の上下に沈線を巡らし、その下に双沈線で鋸歯文が描かれる。内面は頸部に刷毛目が施され、体部はナデで仕上げられる。51は包土中から出土した高環の小片である。坏部は屈曲して立ち上がり口縁部は外反する。口径の推定はあまりにも小片すぎて不可能であるが、口径の大きなタイプのものと思われる。器面は摩滅し明瞭さを欠くが、刷毛目後ミガキ施している。52は5号溝状遺構から出土した高環の小片である。坏部は屈曲した後やや丸みをもって立ち上がり、屈曲部には段を有す。口縁部を欠失するが、立ち上がりの状態等から口縁部の近くまで残存していると思われる。屈曲部の径は16cmと推定され、口径の小さいタイプのものと思われる。53・54は6号溝状遺構から出土した。53は鉢の口縁部付近で、口縁部はヨコナデされ、体部はケズリが施される。54はミニチュアの土器で、外傾する短い口縁部からやや張りをもつ体部を経て丸底を呈す底部に至る。55～57は7号溝状遺構から出土した。55は甕で口縁部が強く外傾し、体部との境は明瞭である。口唇部は摘み上げることにより肥厚させる。体部中位以下を欠失するが、ほぼ球状の体部を呈すると思われる。残存部の調整は外面頸部下に横方向、以下は斜方向の細かい刷毛目を施す。内面は頸部直下から丁寧なケズリを施し、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。56・57は逆し字状を呈す甕の口縁部である。器面は摩滅している。



第21図 溝出土土器実測図 (縮尺 1 / 3) — 24 —

## IV 小 結

### 1. 1号住居跡出土の土器

出土土器の1～5は寺沢薫氏の布留0式<sup>註1</sup>、柳田康雄氏のI b式<sup>註2</sup>に相当する布留形甕である。また6はいわゆる山陰系と言われるものである。高坏は形態的には35→36→37という変化を遂げていると考えられるが、田崎氏の有田式土器古相段階<sup>註3</sup>の範疇に収めることができよう。小形の甕や壺の底部も丸底を呈しており、ほぼ1号竪穴式住居跡出土の遺物は柳田氏のI b式、田崎氏の有田式土器古相段階に比定できようが、7～12の在地系の中形の甕は図示しなかった小片も含め、底部はいずれもあまいレンズ状を呈す。これらの特徴は柳田氏の終末～I、田崎博之氏の第I・II型式に見られるものである。口縁部が直立する等の新しい様相も見受けられるが、総じて中形の甕については、この時期まで、このようなレンズ状の底部が退化したような底部や、凸帯を巡らす等の古い様相が残っているとと言える。

### 2. 3号住居跡出土の土器

41～43は出土状態からほぼ同時期に廃棄されたと思われる。42は底部がレンズ状を呈すが、頸部が太く、凸帯が最大径位よりやや下った位置に巡ることから後期中葉より後出的と考え、田崎氏の西新町式土器古相段階に当てたい。41は底部がさらにあまくなり、ほぼ同段階と見てよいだろう。43は体部中位の最大径位からすばまり丸底を呈す点は松木I期<sup>註4</sup>bに近いが、底部はまだ丸みが強い。調整も在地的であり、三雲遺跡イフ地区大溝上層出土の短頸壺とされる土器<sup>註5</sup>が松木I期の土器の影響を受けつつ出現したものと考えられ、松木II期の松木遺跡140街区8号住居址出土の小形甕<sup>註6</sup>に比べると口縁部や体部により古い様相を認められる。胎土や作りからみても日用雑器とは一線を画す土器であろう。

### 3. 3号住居跡出土の小型仿製鏡について

当遺跡出土の小型仿製鏡は高倉洋彰氏の分類によるII bに属する<sup>註7</sup>。しかし、一般にII bは比較的端正な背面文様をもち、花文は緩やかな弧を呈すが、当仿製鏡の背面文様はかなり粗く、花文も弧状と言うよりは、むしろ半円形に近い。この目の粗い櫛歯文帯はむしろII aに分類されるタカマツノダン<sup>註8</sup>や弥永原出土の鏡<sup>註9</sup>に類似する。また、曲がりの強い花文もII bよりはII aに分類される惣座<sup>註10</sup>または徳王出土のもの<sup>註11</sup>により近いものを見ることができる。このことから系譜的には当鏡はII aの花文が弧線化した最も古いタイプのII b<sup>註12</sup>と言えよう。さらには面径を5

mm単位で見ると表のようになる。Ⅱbの面径は当鏡を除き6.9～8.6cmに収まり、7.5～8cmにピークを持つ山形を呈す。Ⅱaは花文に加え図文をもつものが6.1～10.0cmと広範囲で、7.5～9.5cmに出土例が多い。また図文を欠くものは、8.5cmの一点を除き6.9～7.8cmの範囲で7～8cmに大半が収まる。Ⅱbでは面径の小さいものほど背面の楕歯文等が比較的粗い傾向をもち、Ⅱaについても楕歯文の粗い物は面径が小さく、図文をもつものは全体的に楕歯文が細かい傾向がある。このことはⅡbはⅡaの図文をもたないものに系譜をたどることができよう。

- 小形仿製鏡 内行花文鏡Ⅱb
- ▲ 小形仿製鏡 内行花文鏡Ⅱa(図文帯を有しない鏡)
- △ 小形仿製鏡 内行花文鏡Ⅱa(図文帯を有す鏡)

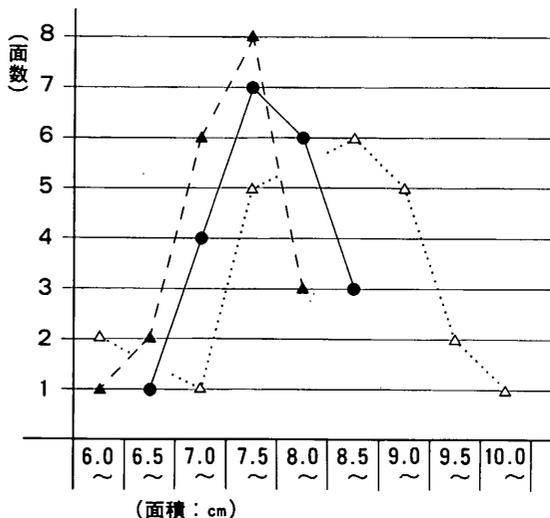


表3 小形仿製鏡面径出土量  
※データは註7cによる。

#### 4. ま と め

今回調査を実施した地域は、日焼遺跡の南端の一部に過ぎないが、試掘調査において陶器Ⅰ様式の出土を見ており、<sup>註13</sup> 弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落が広がっていると考えられる。周辺でのこの時代の遺跡は多い。御笠地区遺跡<sup>註14</sup>では、竪穴式住居跡等はB地区13軒、D地区23軒、E地区43軒、F地区12軒、G地区74軒が検出されており、このうちの大部分弥生時代後期後半から古墳時代前期のものである。以下、田崎氏の編年によってみると、特にG地区35号住居跡(SX35)は西新町式土器新相段階の土器を多く出土しているが、外来系の土器は見られない。B地区2号住居跡(SX02)の土器は有田式土器から柏田式土器の段階を中心にかなりの時期幅をもつ土器が出土しているが、有田式土器段階での在り系の土器が極めて少なく、この時期は外来系の土器が主体を占める傾向が認められる。今回の日焼遺跡の1号竪穴式住居跡出土の土器は有田式古相段階で外来系の土器がこの地域に流入し始めた事を示すもので、宝満川上流域での御笠地区遺跡のB地区とG地区の挟間を埋めるものである。

また、当遺跡の3号竪穴式住居跡、御笠地区遺跡のG地区32号住居跡(SX32)において仿製鏡が、また御笠地区遺跡70号トレンチの竪穴式住居跡(F地区試掘調査)で蝙蝠座鈕連弧文「長宜子孫」銘鏡の鏡片が廃棄されている。G地区32号住居跡は出土遺物が小片ばかりで、かなり

の混ざりもあるが、内傾する口縁部をもつ二重口縁壺片や高坏の小片から、概ね弥生時代後期後半頃と推測される。また70号トレンチの方は弥生時代終末とされている。このような仿製鏡や船載鏡片の廃棄の後に外来系の土器が流入し、宝満川上流域西側の峠山遺跡の周溝墓<sup>註15</sup>や同東側の阿志岐古墳群B群22～26号墳<sup>註16</sup>が築かれるようになるのであろうが、廃棄が外来系土器の流入に伴うのではなく、また外来系の遺物の入り方が段階的であることから、外来系土器の流入以前には社会的な内部矛盾を抱えていたのであろう。

#### 註

- 註1 寺沢 薫 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』所収 榎原考古学研究所 1986
- 註2 柳田康雄 「三・四世紀の土器とかがみ一伊都の土器からみた北部九州一」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
- 註3 田崎博之 「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120 1983
- 註4 佐々木隆彦 「松木遺跡群出土土器の展開」『松木遺跡』 那珂川町文化財調査報告書第11集（下巻）所収 那珂川町教育委員会 1984
- 註5 『三雲遺跡』Ⅲ 福岡県文化財調査報告書第63集 福岡県教育委員会 1982
- 註6 『松木遺跡』Ⅰ 那珂川町文化財調査報告書第11集（上巻） 那珂川町教育委員会 1984
- 註7 a 高倉洋彰 「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号所収 日本考古学会 1972
- b 高倉洋彰 「弥生時代小形仿製鏡について」『弥生時代社会の研究』所収 1981
- c 高倉洋彰 「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第70巻第3号所収 日本考古学会 1985
- 註8 註7 a 文献に掲載（長崎県タカマツノダンⅢ鏡）
- 註9 註8 に同じ（福岡県弥永原鏡）
- 註10 『惣座遺跡』 大和町文化財調査報告書第3集 大和町教育委員会 1986
- 註11 註8 に同じ（熊本県徳王鏡）
- 註12 本報告を行うに当たり、高倉洋彰氏の御好意により実測図、拓本等の資料を拝借し、また貴重な助言をいただいた。感謝する次第である。
- 註13 「卸売市場予定地試掘調査」『鞭掛遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書第17集 筑紫野市教育委員会 1987
- 註14 『御笠地区遺跡』 筑紫野市文化財調査報告書第15集 筑紫野市教育委員会 1986
- 註15 小田富士雄 「西日本における発生期古墳の地域相」『古文化談叢』第4集 古文化研究会 1978 前掲註2
- 註16 『阿志岐古墳群』 筑紫野市文化財調査報告書第7集 筑紫野市教育委員会 1982  
『阿志岐古墳群Ⅱ』 筑紫野市文化財調査報告書第12集 筑紫野市教育委員会 1985

版 圖

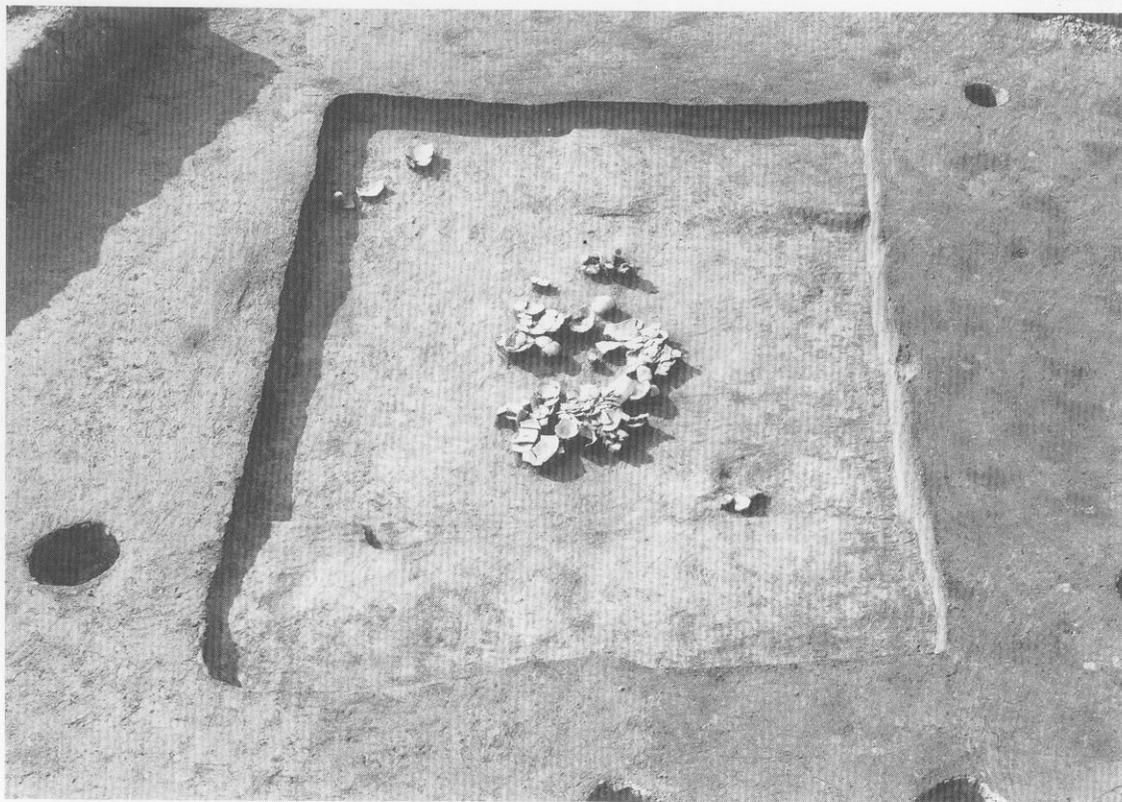




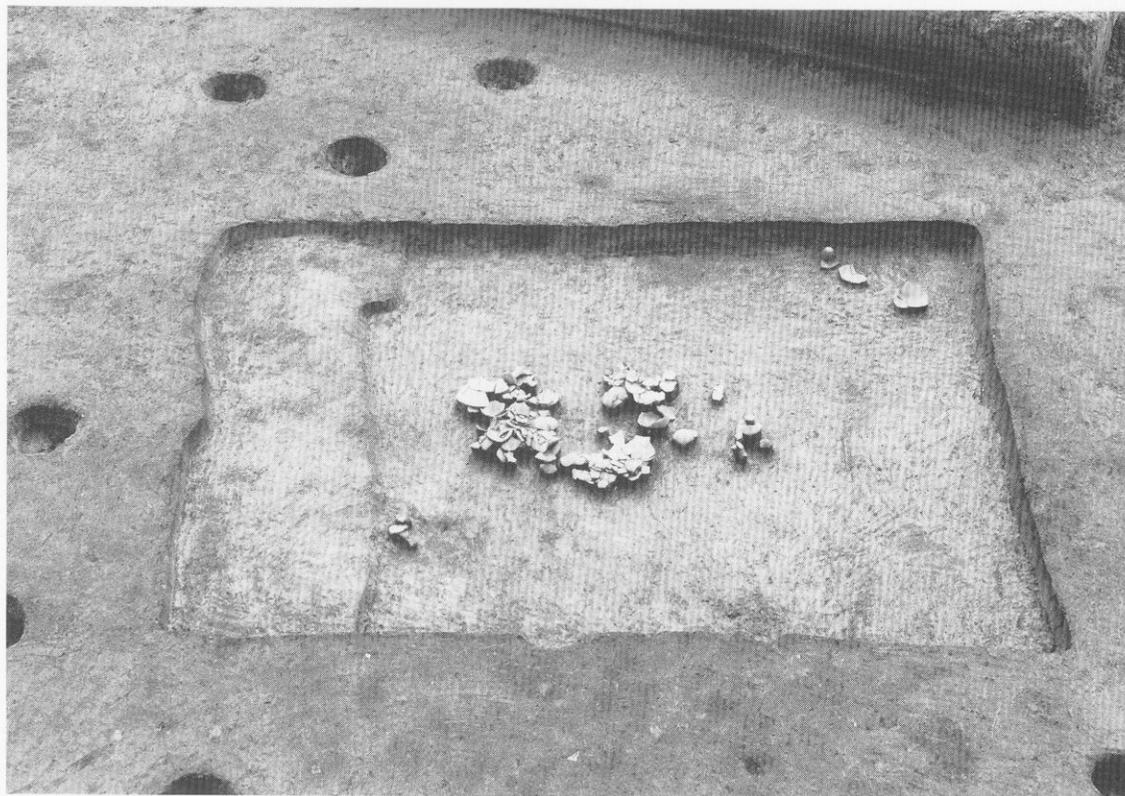
(1) 日焼遺跡遠景（東から）



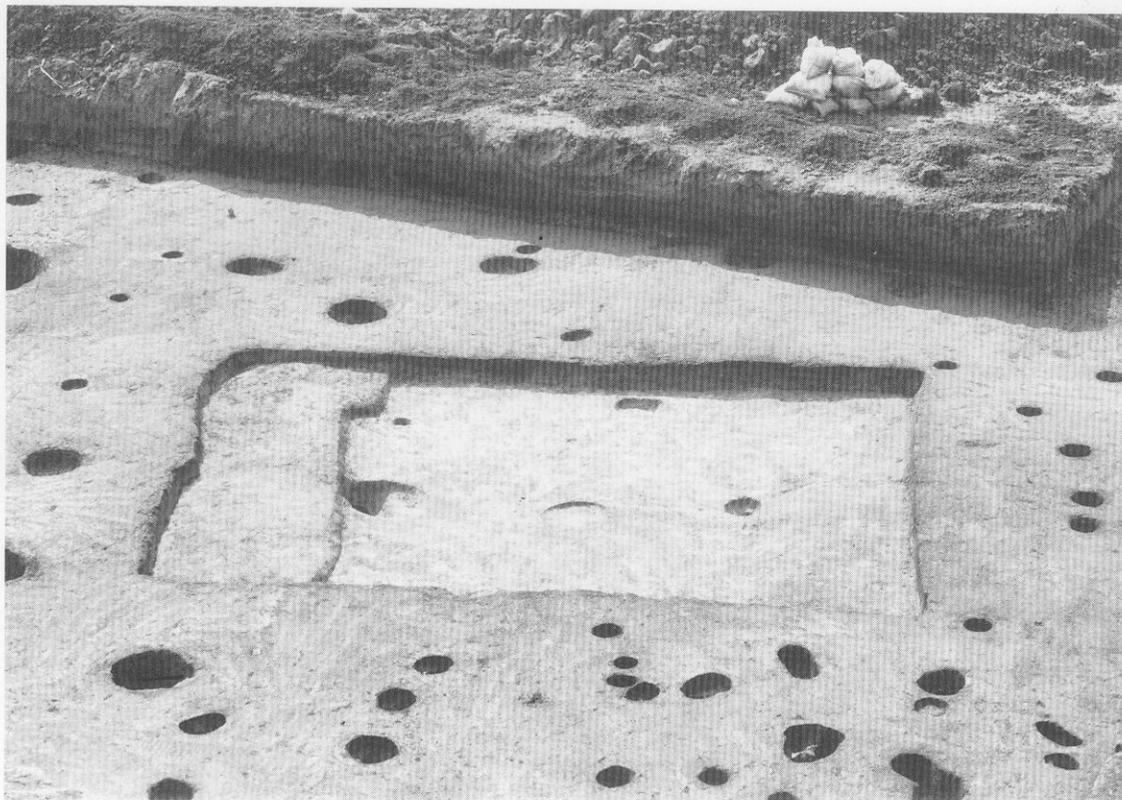
(2) 調査区全景（上空から）



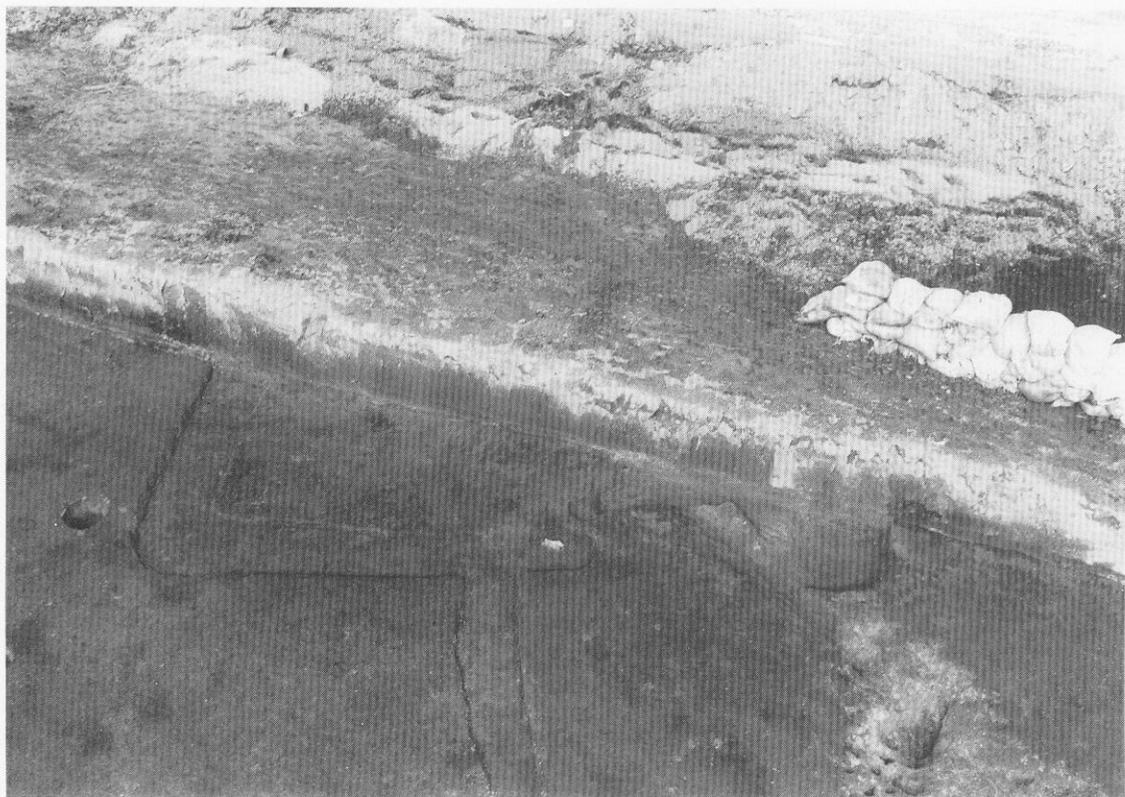
(1) Ⅰ号竪穴式住居跡（東から：遺物出土状況）



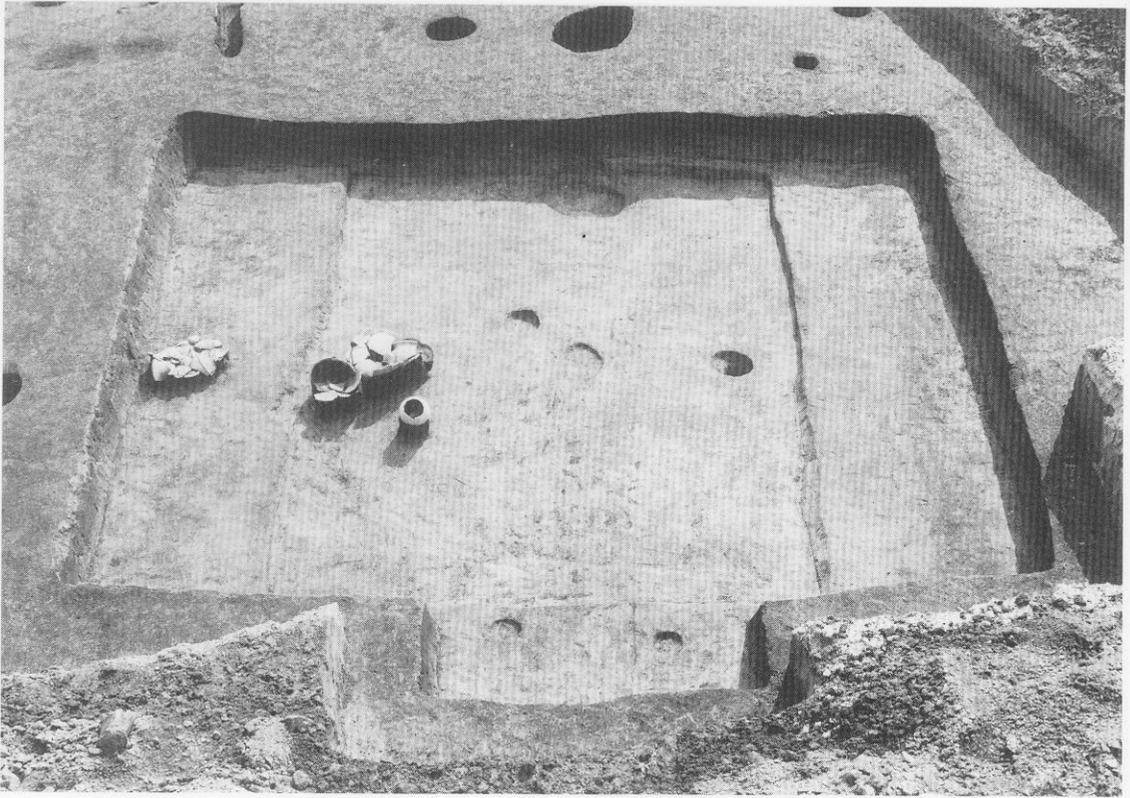
(2) Ⅰ号竪穴式住居跡（北から：遺物出土状況）



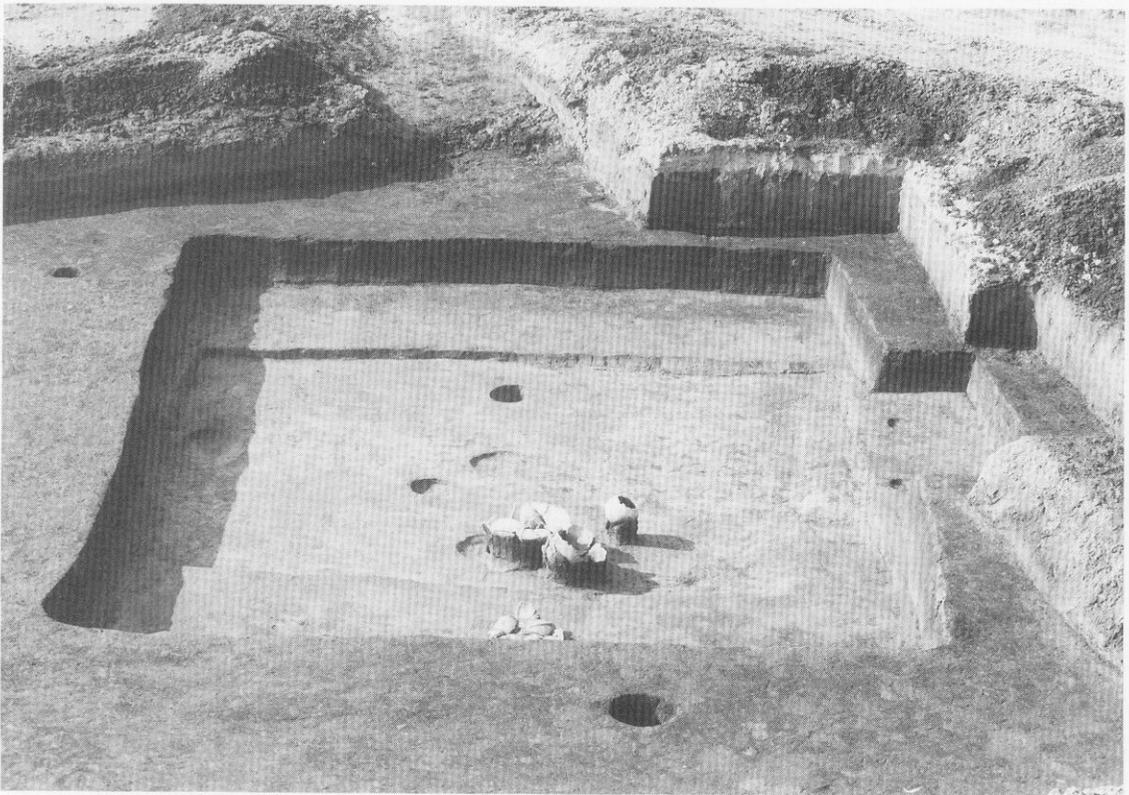
(1) 1号竪穴式住居跡（北から：遺物除去状況）



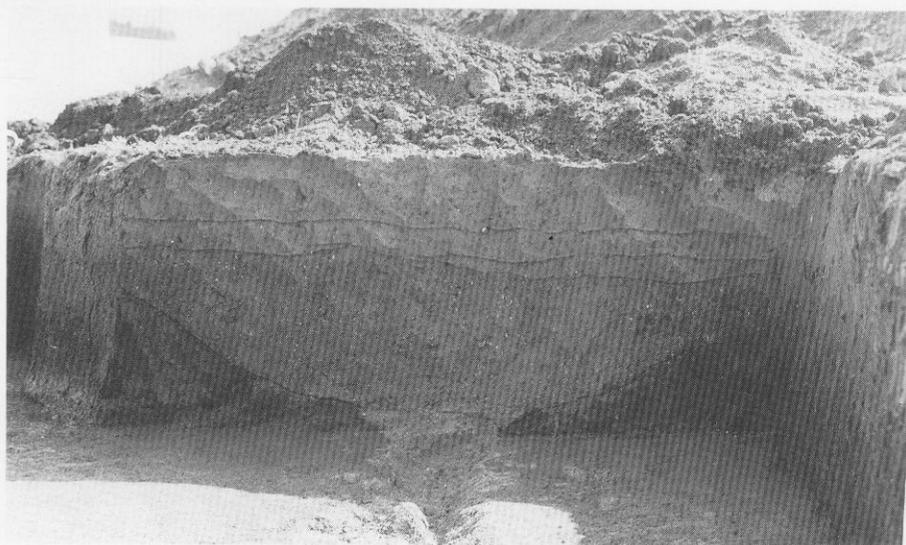
(2) 2号竪穴式住居跡（南から）



(1) 3号竪穴式住居跡（西から）



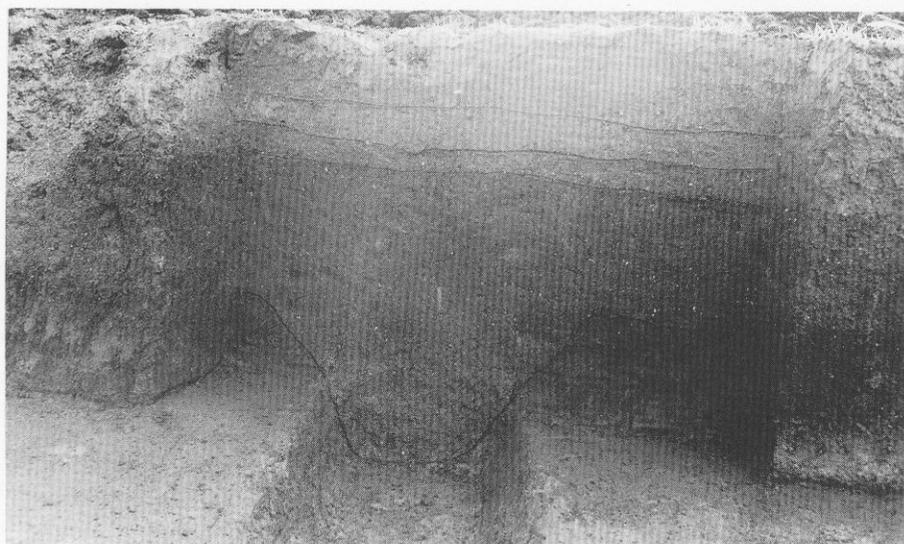
(2) 3号竪穴式住居跡（北から）



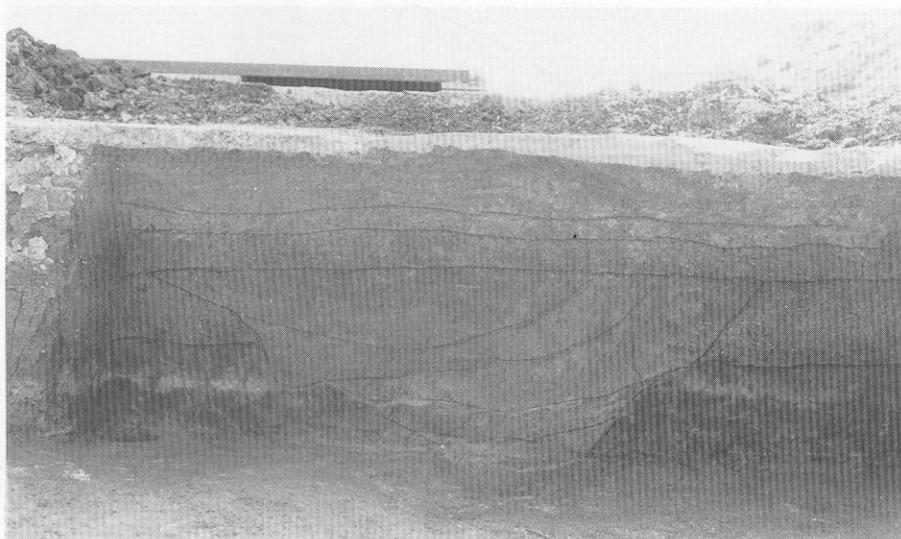
(1) 2号溝状遺構  
断面図



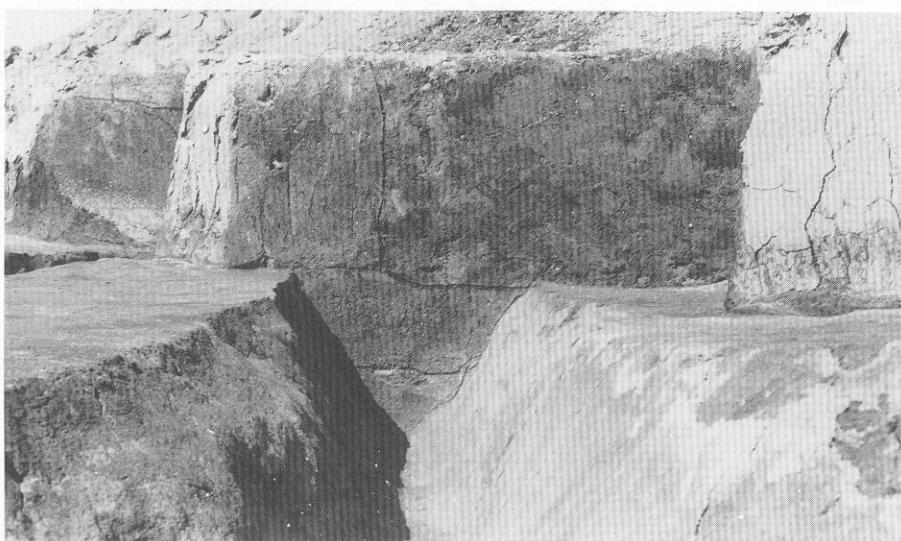
(2) 3号溝状遺構  
断面図



(3) 4号溝状遺構  
断面図



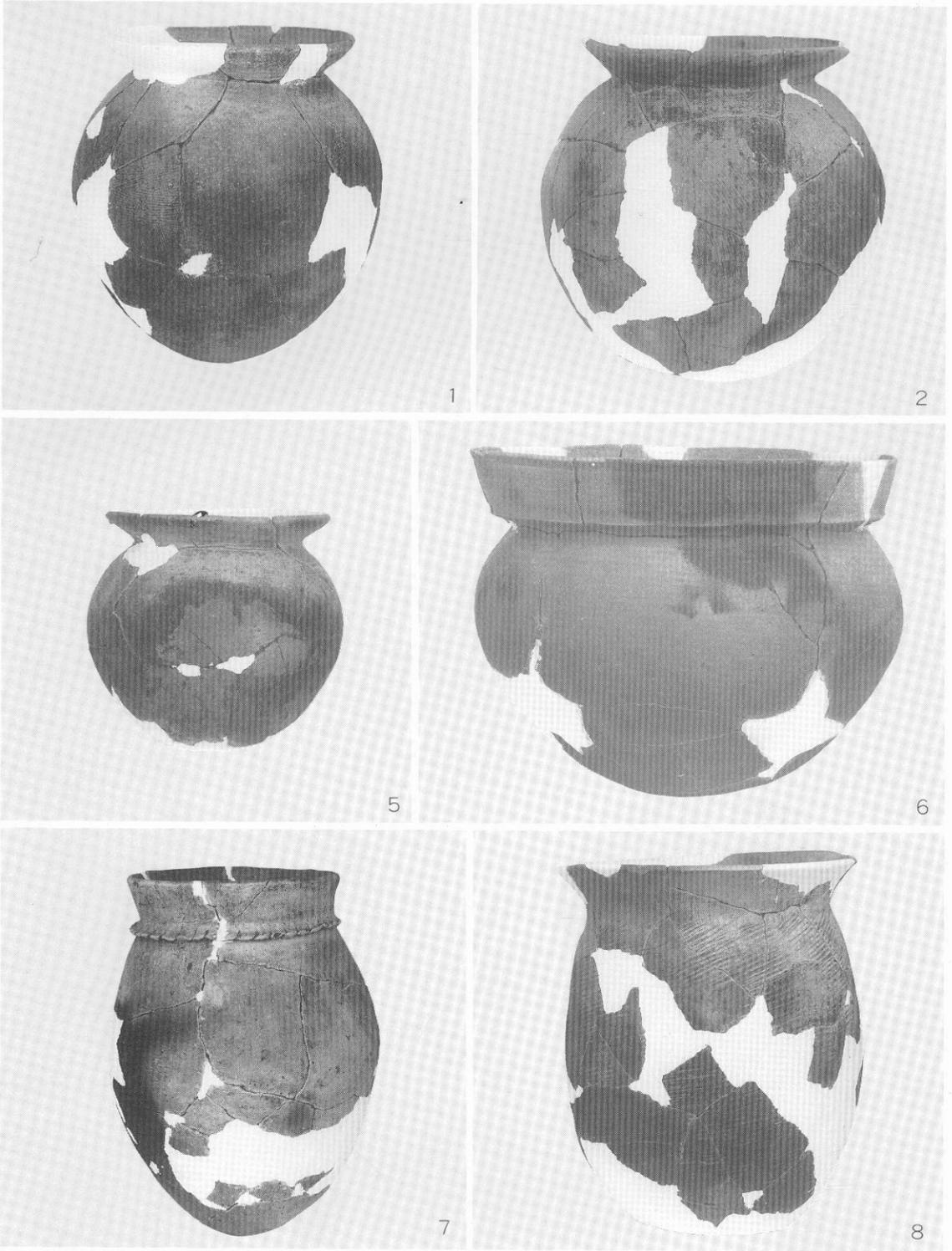
(1) 5号沟状遺構  
断面図



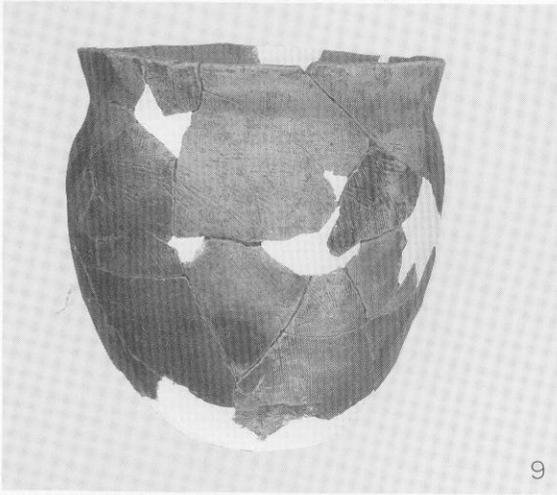
(2) 6号沟状遺構  
断面図



(3) 7号沟状遺構  
断面図



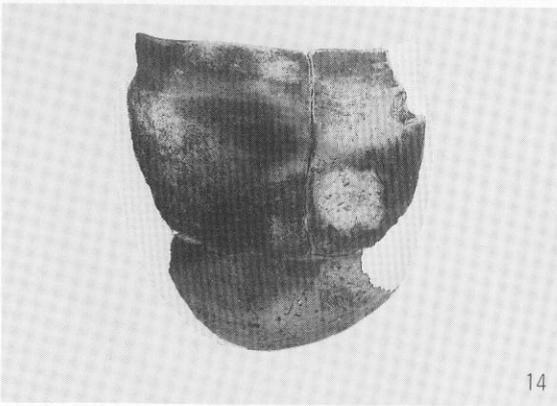
1号竪穴式住居跡出土土器  
写真番号は挿図遺物番号と同じ



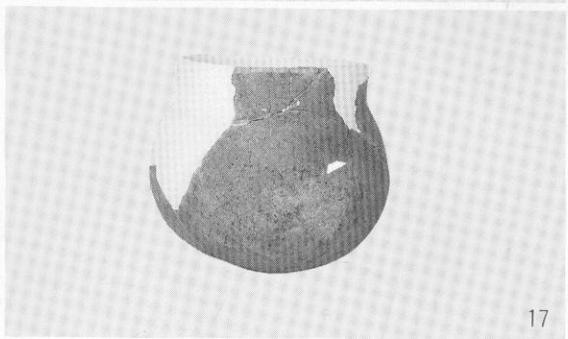
9



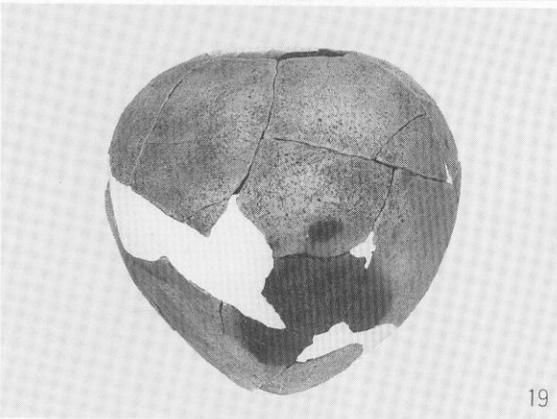
10



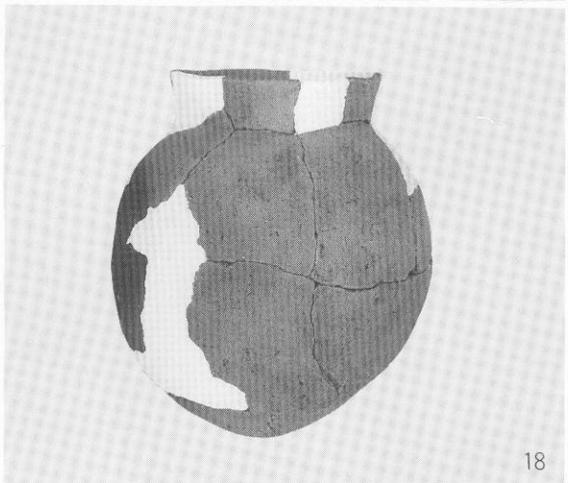
14



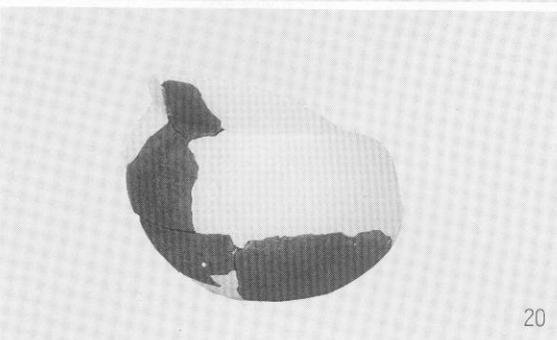
17



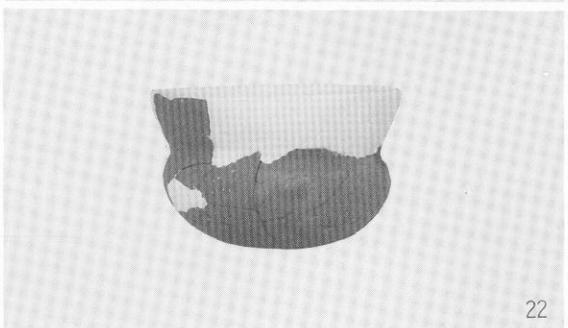
19



18



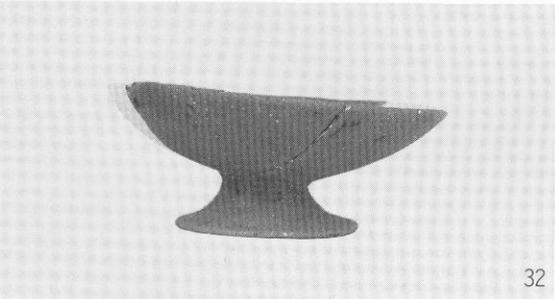
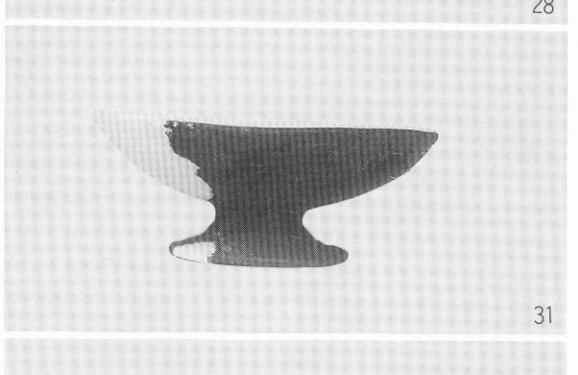
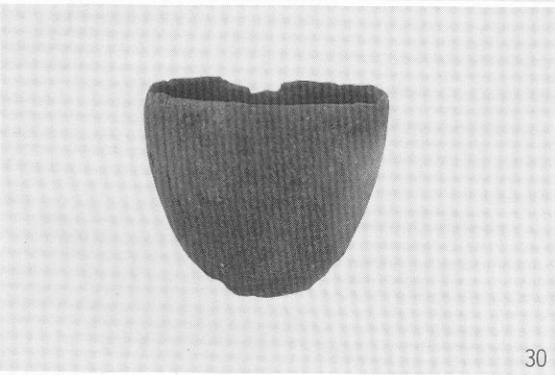
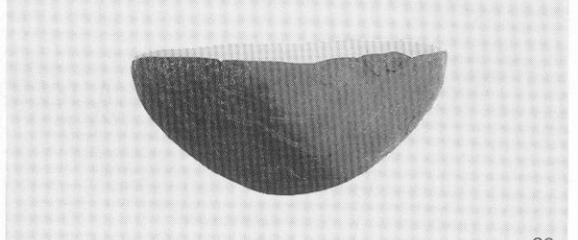
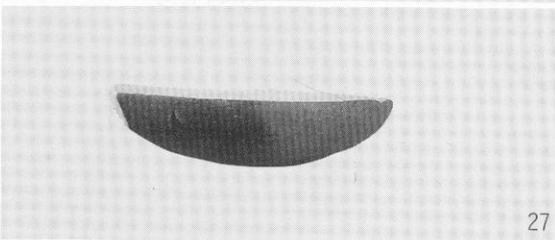
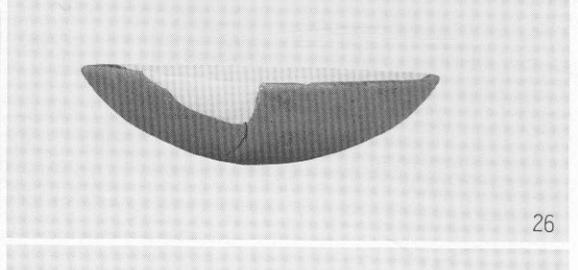
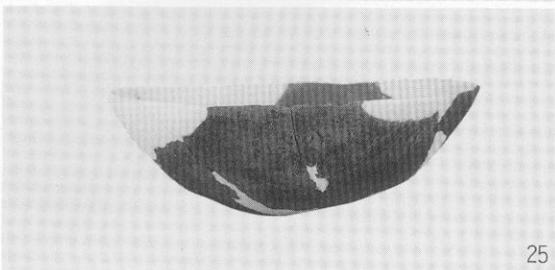
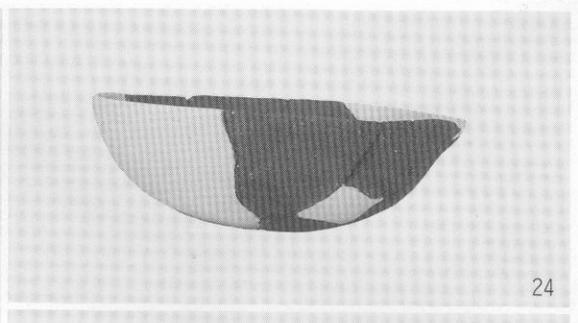
20



22

Ⅰ号竪穴式住居跡出土土器

写真番号は挿図遺物番号と同じ



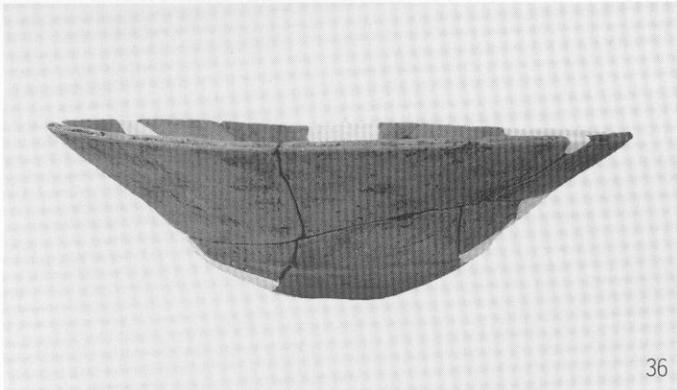
Ⅰ号竪穴式住居跡出土土器  
写真番号は挿図遺物番号と同じ



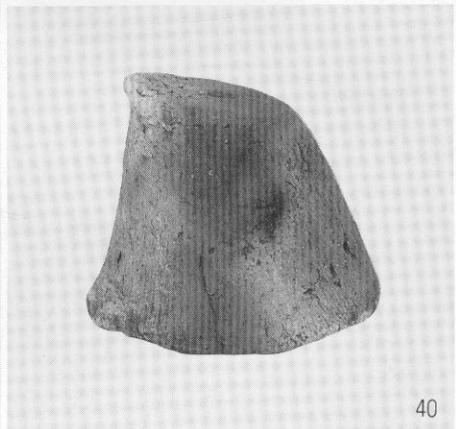
35



38



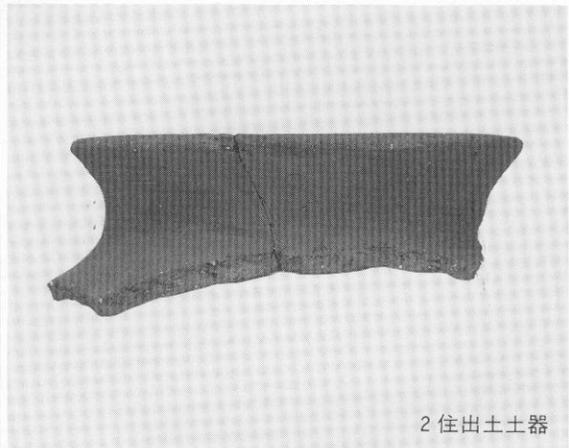
36



40

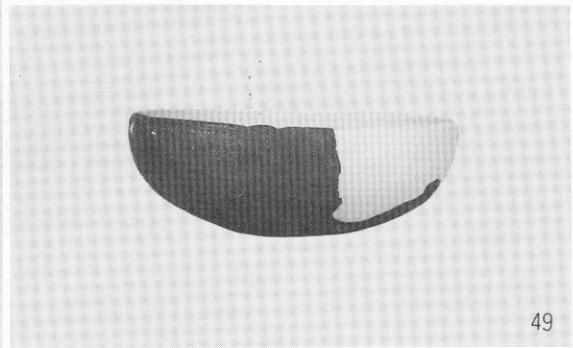
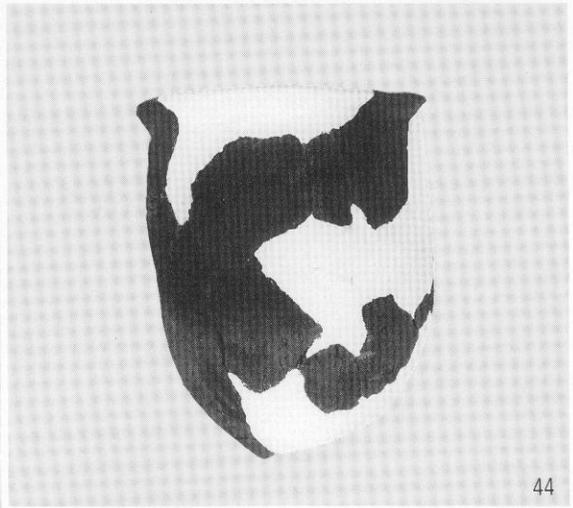
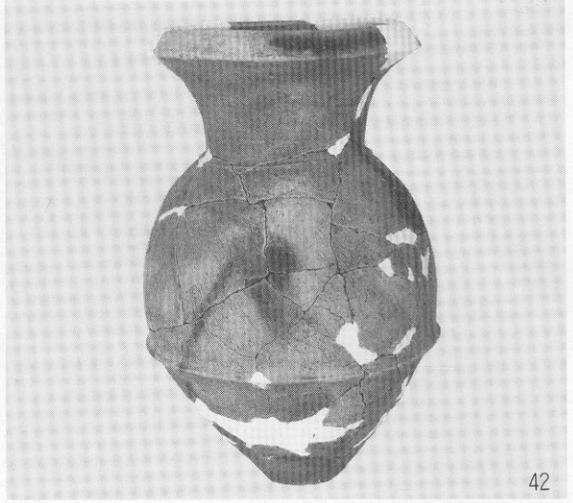
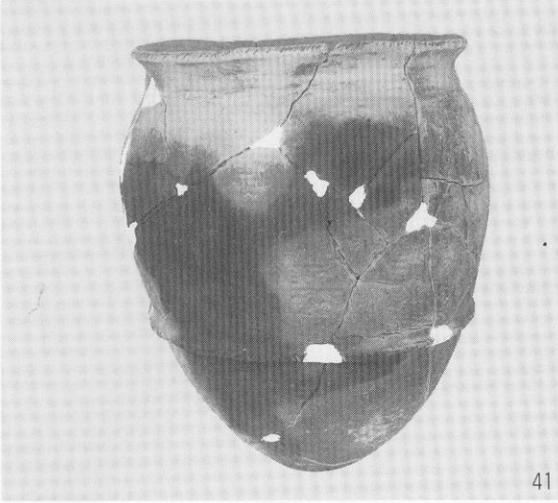


37



2 住出土土器

1号・2号竪穴式住居跡出土土器  
写真番号は挿図遺物番号と同じ



3号・4号竪穴式住居跡出土土器  
写真番号は挿図遺物番号と同じ

# 日 焼 遺 跡

筑紫野市文化財調査報告書  
第 20 集

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会  
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印 刷 株 式 会 社 川 島 弘 文 社  
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41